Dua Kajero. Novembro 1921.

5861
2144
no.5

大正十年十月廿九日印刷納本
大正十年十一月一日發行

LA SEMANTO

種蒔く人

□行動と批判□

第一年 第一巻 第二號

飢ゑたるロシアの爲めに

十一月號

種蒔き社

BERKELEY
LIBRARY
UNIVERSITY OF
CALIFORNIA

Digitized by Google Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

嘗て人間は神を造つた。今や人間は神を殺した。造られたもの、運命は知るべきである。

現代に神はゐない。しかも神の變形はいたるところに充滿する。神は殺されるべきである。殺すものは僕たちである。是認するものは敵である。二つの陣營が相對する。この狀態の續く限り人間は人間の敵である。その間に妥協の道はない。然りか否かである。眞理か否かである。

眞理は絕對的である。故に僕たちは他人のいはない眞理をいふ。人間は人間に對して狼である。國土と人種とはその問ふところでない。眞理の光の下に、結合と分離とが生ずる。

見よ。僕たちは現代の眞理のために戰ふ。僕たちは生活の主である。生活を否定するものは遂に現代の人間でない。僕たちは生活のために○○の眞理を擁護する。種蒔く人はこゝに於て起つ――世界の同志と共に！

種蒔き社

目次

『マキシムゴルキのために』題言
現實のロシアと架空のロシア（評論）……平林初之輔
Tristitia mundi（詩）……村松正俊
北天の星（詩）……百田宗治
ロシアの民衆に與ふ（詩）……加藤一夫
幹が私を刺した日（詩）……大藤治郎
亡き友を憶ふ（詩）……小牧近江
神樣とロシア（詩）……金子洋文
飢えて死ぬロシアに（詩）……川路柳虹
血の日曜日（詩）……井上康文
再生の日の海を眺めて（詩）松本淳三
翼のごとく（詩）……福田正夫
酋長と噴火（童話）……秋田雨雀
村長殺し（小說）……片岡厚
火を點ず（小說）……小川未明
批評欄――小牧―弘二―賢三―二郎―
正俊―正夢―孝丸―洋文・
表紙及カット――柳瀬正男
世界欄――地方欄――漫畫欄――雜―

執筆家

秋田雨雀　有島武郎
馬場孤蝶　アンリ・バルビュス
エドワード・カーペンタ　クリスチアン・コルネリセン
江口渙　ワシリイ・エロシエンコ
藤井眞澄　藤森成吉
福田正夫　アナトル・フランス
ポール・ジル　長谷川如是閑
林倭衛　平林初之輔
石川三四郎　神近市子
加藤一夫　川路柳虹
宮地嘉六　宮島資夫
百田宗治　小川未明
ポール・ルクリユ　白鳥省吾
富田碎花　山川菊榮
吉江喬松

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

マキシム・ゴルキーのために

もしも、果つ可き運命であつたら、とうに果てたであらう。（九字抹消）赤色ロシアは四年の間、踏みにじられ、掻きむしられて來た。しかも、野蠻のロシアは、依然としてその地位にゐる。（廿一字抹消）これは争はれぬ事實だ。

多くの藝術家は、この（四字抹消）野蠻國を呪つた。すべての藝術家は、今の世のつゞく限り、あらゆる（三字抹消）を讃美しなければならなかつたのに。

マキシム・ゴルキーは常に反抗せる奴隷のための藝術家であつた。

僕たちは革命ロシアについて多くいふ自由を持たない。しかし、世界の反動が、ロシアに對して、虚僞と憎惡の極度にある今日、僕たちは常にプロレタリアの味方であつた藝術家マキシム・ゴルキーを稱讃することをもつて、僕たちの意志全部の表現とする。

一九二一年十一月七日　　種蒔き社

東167805
Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

現實のロシアと架空のロシア

平林初之輔

（本文三頁全部削除）

Tristitia Mundi

村松正俊

偉大なる日の影が近づいてゐる
あらゆる人間の充されざる願望がをののいて
ひそかに抱いた夢の日が近づいた
おお、光榮よ！

ふるきものゝ醜き姿がふるへて
白晝の嘆きに恐怖を談る
恐怖は生みの親であつた
自らの命は何人もが負ひ得ない

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

誇らしき跡が心のいたみに堪へかねて
か弱き救ひの手を未來の敵に求める
時は希望であつた
しかも自らの知らない希望であつた
與へられた存在が唯一の寶庫である
去つた後は知る由がなかつた
屈從は忍びやすい
追はれたる名譽は千の涙である
涙が存在をかへすとは何人の哲學であるか
罪である
物いはぬ罪は他に倚據する
支柱は離剝した
生きたるしるしを混沌に歸すれば
眞赤に燒けゆく心がをごる
昏迷の交歡は地上の誇りである
もえ上る炎の領土は
日の影を夢みてその奧に巢くふ
鬼面の舞踊は人に知らさず
密に接する心ののろひ
死せる靈の足がたゆたふ
おお！
現在であつた

拔目もなくきりひらいた大道が通じて
ちりにまみれた都に走る
そこに酒がある
そこに美がある
そこに命がある
そこに血がある
たくみにならされた獸がをどる
をごりは悲しく鐘と共にひかつて
外を見ない眼はひらめき
くらい内へ内へと引つ込んでゆく
網が設けられる
そこに何物かゞ捕へられる
捕へたるものは無智である
彼等は幸福に醉ふ
彼等は享樂する
彼等はいのる
彼等は喜ぶ
遂にひろげられたものが戰慄であつた
豫言は物憂い
用意はたしかである
哲學であつた
教育であつた
法律であつた

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

政治であつた
すべてのものが昏迷して
歌はれざる人の眼にうつゝてゐる
芽は新らしい
明けゆく春の大氣を吸ひ入れれば
クラシツクの批評が滅盡して
開かれたサンボリツクの藝術が物言ふ
流れる水は淸らかに
そびえる山は美しい
透きとほる精神の黎明に
ニイチエの子等が勇躍する
命は談る
命はあまりに痛みやすい
來るべき日の喜びがもえて
いたづらに夢みる心を打つ
日は盡きる
盡きた日がうらめしい
世界は堂々と廻轉して
生の前途を展開する
命がそこに響應して
二つとなき世界進行のリトムをつくる

一つの種子が數　に分裂して
地上に散亂するやうに
いたるところに蜂起する未來の嘆き
しばられた個體の瓦解ののろひ
紛迷の亂鬪が時をつげる
全ての人なるところのものが
欠けたる跡に躊躇する
未來である
希望がたゆたふ未來である
牢獄に投ぜられた自由思想家が
自分の上に時を告げるやうに
あらゆる警戒と用意を拔けて
胸に思ひ込む神秘のながれ
あらゆる人なるところのものに
世界の心が展開をつゞける
そのとき世界は大きくなつた
嘆きなき朝の眩惑！
涙に充ちた奇蹟の錯愕！
傳へられざる昏迷！
新らしさ創造に對する嫉妬！
過去を負へる時代の錯誤！
一切が恐怖である

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

大きくなつたものに對する恐怖である
そこに徹底せざる迷ひが浮び
いたづらにもてあそんだ哲學をうらむ
詐欺である
合法的の詐欺である
敎へは尙かつた
哲學は正しい
しかも自らを知らざる哲學であつた
偉大なる世界はほほゑむ
狂ひ逆らつた過去のひらめきを見下して
偉大なるすべての人なるところのものは
冷たいほゝゑみを世界と交はす
未來である
何人の血と共に流れる未來である
あらゆる詐欺と
あらゆる哲學と
あらゆる法律と
あらゆる敎育と
あらゆる政治とから解放される朝である
來るべき日は偉大である
あらゆる人間のねがひを充たす朝である
おお!

心はふるへる
それは來るべき世界のふるへである
豫言は物憂い
來るべき日の影が近づいた
それを感じながら
囚はれたゝ身を顧みれば
感じやすい心は嘆きである
世界の悲みは——
來るべき日の影を見たことである
透きとほる思想の夜明けは
秋の日のやうなつめたさを以つて
世界の動搖を
ニイチエの子等と共に期待する

北天の星

百田宗治

遠い北天の夜ぞらにかゝつて、
のたうち、自苦の炎に燒かれる
一つの新しい變光星を我は見る。

『實現』の爲めに
露西亞よ、汝はその旗を振つた、
それは曾て染められたことのない(十二字抹消)
に彩られてゐる、
露西亞よ、『あらゆる艱難と試練の荊棘の路を
汝は赤裸の肉體を以て分け入つた。

『實現(レアリザフシオン)』の爲めに、
露西亞よ、汝はその旗を振つた、
それは且て染められたことのない(十二字抹消)
彩られてゐる、
露西亞よ、あらゆる艱難と試練の荊棘(いばら)の路を
汝は赤裸の肉體を以て分け入つた。

露西亞よ、
〇〇な民衆の力よ、
手がゝりのない絶壁の下に
いま、我は螺集し、殺到するその狂喚を見る、
支柱は落ち、
『〇〇』はその足下に踏みにじられる。

露西亞よ、
飢餓と擾亂の露西亞よ、
おそらくはたゞ一つ、
永遠の星座を失つた地球のやうに、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

露西亞民衆に與ふ

加藤一夫

（本文三頁全部削除）

幹が私を刺した日

大藤治郎

私からきれいに消えてしまつて
トレ〳〵と濕つた幹をたゝくと
おそい、おそい朝のために
カスタニアの葉も、リンデンの葉も

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

幹は、ちつともうごいてくれず
そればかりか、やはらかな掌（てのひら）を
どこまでもいたませる――
さうして幹がくろくふとく
冬の空につきさゝつてゐた

たち消えた煙草に火をつけよう
幹をやいてくれて
あの緑の葉さへ戻してくれさうだから
けれど、何本燐寸の棒をすてゝも
私の可愛いゝ靴音は
この空にひゞいてはくれない

おそい、おそい朝のために
太陽は私から出遅（おく）れてゐる
なんど、はいでも、めくつても
わたしの心で想像のできるものは
しらちやけた街道を這　てゆく
あの痩せ犬の薄い影のかたまり
しかしそれも消えろと
まだ、幹がくろくふとく
冬の空につきさゝつてゐた。

なぜ怎麼（こんな）ところにゐるのだらう………
下宿の窓の方に向つて
あるつたけの智慧をしぼつて
あかちやけた椅子と薄暗い寢床とを
丁寧において、考へた
けれど、どこか冬の風が洩れて
足の先をつめたくしさうな道具建
あれを毀うと、考へなほして
もいちどはつきり下宿の窓のなかを
ふかく確りとのぞいたら――
やつぱり、幹がくろくふこく
冬の空につきさゝつてゐた

チョコレートをつゝんだ銀紙（ぎんがみ）を
三つも隱しに入れて
今朝（けさ）、百姓家の方へ
それを玉子と取りかへに
二人（ふたり）だけよろこぼうと、考へた

七つの玉子が私に秘められ
ノイハーゲンの村の出口へくるこ
――お前さんは國へ歸れていゝや
――なにさ、あしたの新聞をごらん

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ぐろく笑つた、そして去つた男
七つの玉子、七つの玉子
お前は下宿の扉まで割れずにゐてくれ
全人間のそのひとりが
今日も、よろこべるのだ。

次の朝早く水兵の列をみた
赤いキンが先頭に
彈藥庫附の海兵かと思つた

新聞はとう〳〵來ない
町は、あかるいのに
一人ら子供の顏をみない
アムザンデの廣場の方から
うたがきこえる、重い人間の聲で
私は窓をあけて
もつと、はつきりきこうとした

つめたい喝采が私の血をめぐる
古井戸の底で繩の端を得た人々
誰が誰を祝福せねばならないのか
寂しい私は
さうしてこの靜けさのなかに
思ふ存分歩いて
疲れで、それをまぎらさうとした

黄色い旅人、黄色い旅人
（お前は何處まで行かうといふのか）
遠い東の國を、いま目のまへに
ぢつこたちすくんだ私のこゝろ——
そこへも、くろくふとい幹が
はつきり、つきさゝつてしまつた。

（一九一八年獨逸のある町に居て私は革命を見た）

亡き友を憶ふ

——ジャン・ド・サン・プリーをおもつて——

小牧近江

友よ君は今夜のやうな寒い晩
まだ癒りもせぬ君の弱いからだを

無理をしてあの集會に出てくれたが
友よ　かなしい友よ
それがもとでわづか一週間もたゝぬ間に
君は死んでくれた　あゝ友よ！

あゝ友よ　君はなんといふ熱と狂喜で
○○○○の統御をうたつてくれた
一九一七年の初冬　十一月七日
友よ　君はなんといふすさまじい反抗と憤怒で日和見の味
方をのゝしつた
友よ　あの頃多くの味方は○○○○○の敵であつた
多くの味方は○○○○○の獨裁とその制度を忌避した
友よ　君はプロレタリアの獨裁を肯定した
そして君は○○○○を絶體眞理としたのだ
あゝ　先見の友よ　賢明の友よ
いまはかくある

十月の末　プラタンの落葉は
あてどもなく地上をさまよう
僕たちはカフエ●リラのテラスで
秋の最後の日を浴びてゐる
老主義者と私
そして　ラボボールは小汚ない髯をビールの中に入れる

友よ　僕たちはいま君の憶にふけてゐる
君はまだ少年であつた
君はあの弱々しい身で老主義者を襲つた
そして君は手ひどく彼の態度をのゝしつた
あゝ友よ君は○○の眞理には何ものもなかつた
やがて　老主義者は君の眞理を肯定しなければなかつた
のだ

僕たちはカフエ●リラのテラスで
秋の最後の日を浴びてゐる
老主義者と私
そしてふたりは君の憶ひにふけてゐる
あゝ　友よ　亡き友よ　二十歳（はたち）の友よ！
　　ジユネーヴの旅窓にて、一九一九年十一月七日

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

神様とロシア

金子洋文

（本文一頁削除）

飢えて死ぬ露西亜に

川路柳虹

つゞけさまの颶風だ！
つゞけさまの嵐だ、雪だ、吹雪だ！
もう草も枯れ、木も枯れ、
嵐は障害のない野をかけめぐる！
狼よ、おまへの餌は自由だ！
人はおまへを食ひたい位に飢えた、
だが、おまへを殺す力もないのだ、今は！
手に刃物をとる力もないだ！
闇夜にたけり狂ふ吹雪、吹雪！
人が倒れる、蒼ざめた裸體の骸骨、
嵐よ、吹きまくれ！
この土の裂けるまで！

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

憐れな瀕死の農民らを
突き倒し盡すまで！
嵐よ、かつて街を、王宮を、帝王を、治者を、
工場を、資本家を、地主を
吹き飛ばした嵐！
呪ひの聲をふりたてた黒い惡魔！
終りの運命が世界にきたのか、
吹きまくれ、嵐よ、呪ひが呪ひを殺すまで。
破滅が破滅を殺すまで。

私は恐ろしい叫びをきく、
私は飢えて死ぬものゝ呻きをきく……
嵐のなかに――
あゝ、血ぞめの露西亞、
「惱みの時」を惱みぬいた露西亞！
さうして汝は今饑え死ぬ！
おまへの人類にのこした仕事は
たゞ「不可抗」の試驗か、
嘲笑のもの種か？
世界の人のまへに投げ出した試練が
たゞ意味もなく地に朽ちるのか……。
賢い世の智者よ、學者よ、政治家よ、
無智と無產の農民が
その荒い手に握りしめた土の一塊！
そこには何の實りもなく種もなく、
枯れた草にはたゞ戰ひの血がこびりついてゐることを記
憶したまへ、苦しい人類の闇を
おしひらく無心の力に傷いた血であることを、
記憶したまへ、その血の下に力なく
蒼ざめ朽ちて倒れる人の靈を！

露西亞よ、おまへの祝福される時はいつか、
おまへの曙はいつも嵐だ、
おまへの朝はいつも黑雲だ、苦惱だ、
湧きおこる歡聲はふたゝび地獄へ！
勝利は死へ、希望は絕望へ、パンハ石へ！
あゝ吹雪の下の露西亞よ、
倒れた行路病者よ、
無產の農民よ、
惱みの代償は誰があたへる？
歐羅巴か、亞米利加か、東洋か、
はた、神か、智慧か、運命か、否！
おまへの惱みそのものが
世界を新にする！

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

血の日曜日

河上肇氏の「斷片」を讀みて

井上康文

（本文一頁半全部削除）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

再生の日の海を眺めて

――その日牢舍のを出でたる一革命家の歌へる――

松本淳三

俺は再び海を見るのだ！
ひろい〳〵海を見るのだ！
それは、繪より詩より　もつと大きい、もつと美しい
動いてゐる海、輝いてゐる海！
あゝはつきりと映つて來る海！

俺は岩に腰をおろした
やせた兩手を胸に抱いた
「貴方の御出をどんなに待つたか知れません、
よくも貴方は、生きて再び私の姿を見て呉れます……」
海は大きい胸をたたいて
まづ何よりもにつこりした
そして　鮮な潮の香りを
たえず――俺の體に送つた

泣きたい　笑ひたい　手をふりたい！
また身をぞんぶんに搖すりあげたい！
――この心
俺はかうした自由な體に
そして、あゝ幾年ぶりにこの壯麗な海を見るのだ！
暗い地下室、つめたい板敷
（こゝに來るものはすべての希望を後に見捨てる！）
あの恐ろしい牢舍の裡から
よくも俺だけは生きて出て來た！
あれ、眞白いランチが走つて來る
赤い三角帆のヨット、その上を散らばる鷗の群の輕快さ
波止場に並んで　ぢつと動かぬ
大きい帆船のバウスプリットと　頑丈さうな錨、また錨
でな

彼方――みどりに輝く遠い岬の　だん／＼畠と木立、白雲
青い　マッチ箱のやうな望樓
そこに――かすかに／＼ひらめく旗！
俺は靜かに眼をつむつた
あとから／＼熱い涙が流れてやまない
あゝ……昔から幾百人もの
所謂先驅者ご稱ばれた男が
あそこであのまゝ(丁度俺たちが居たやうに……)
くらい洞穴の底深くとぢられ
そして最後が
(二行抹消)

永遠に陽のめをおがまぬ谷底へ
(一行抹消)

靜かな大空　あかるい暖かな外氣
歌ふ小川と森の寂音――綺麗に色彩づけられた四季の田園
またやさしい妻と　いとしい子供ら
そしてそれらと
動いてゐる海、輝いてゐる海！
かつて朝夕に眺めた海のほのかな記憶を
(あゝすべてが最終審判の日に於て)

彼等は果して憶ひ出さずに居たであらうか？
また、眞理をあざむく教誨師の前に
あるひは、懷中時計を用意する
(二行抹消)

無情極まる監獄醫の前に
(一行抹消)
あゝ……やさしい／＼海の浪音！
それが彼等の意識の面に
しばし響いた(あるひは響いた)
否！響かなかつたごうして言へやう……

俺はやがて眼をひらいた
再び廣い海をみつめた！
(何と大きい、もの珍らしい姿であらうぞ……)
俺は今や自由な體だ！
俺は確實に生きてゐるのだ！
よくもあそこで殺されなかつた！
よくも再び歡喜の世界へ浮び上つた！
最も深刻な「生命」と「正義」を
さらに熱烈に把握して
こゝにみつめる、海！海！海！

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

そしてあらゆる物象よ！
泣け　笑へ　狂へ　おごれ――この心
あゝ俺はこても言葉につくせぬ　あらしのやうな歡喜を透して
海をみるのだ！廣い／＼海をみるのだ！

翼のごとく

福田正夫

空をかける翼のごこく、
一つの心高くこび行き、
民衆のために生るマッスの精神。
あゝ、われら何の爲に、
日々の糧に飢え、
日々の詩に惱みつゝ、
いつの日を待つことぞ。
希望と忍苦と、
長く時を待ちつゝ、
深い呼吸に眞ならしめの姿を、
求めてゐる、求めてゐる。

眞理

人は飢え、
眞理も飢え。
人は疲れ、
眞理も疲れ。
もし人立たば
眞理し立つであらう。

火の精神

（十行抹消）

酋長と噴火

秋田雨雀

昔、渡島の國にシャシベツといふ名高い酋長があつた。この酋長は、アイヌ族の酋長の資格といはれてゐる、雄辯と弓術と、富の三つを申分ないほど備へた立派な酋長であつた。

シャシベツは、二十五歳の頃までに近隣のアイヌを悉く併合して、それ等の領土の富が皆な自分の國に集注した。シャシベツの勇氣を讃へ、シャシベツの威嚴を怖れたものは、單に渡島アイヌばかりでは無かつた、石狩アイヌ、十勝アイヌ根室アイヌ迄が澤山の貢物を持つてシャシベツの御機嫌を伺ひに來た。シャシベツの家は熊や熊の毛皮や、シャモ傳來の刀劍や、家具や其他色々な寶物で一杯になつた。

「アンヌイ」といふ神の聲を聞くことの出來るアイヌの長老達は、いつでもシャシベツの周圍を取卷いて、シャシベツの德を讃美した、そしてシャシベツをアイヌカムイの再來だと言ひ觸らして歩いた。シャシベツは初めの内は自分が果してそれに價するものか何うか自分で解らなかつたが、然しだん／＼自分の中に力を感ずるやうになつた。

『カムイシャシベツ／＼』

といふ噂がアイヌ族の間に新たに「力」と「迷信」を注ぎ込んだ。

然し、然し――ある時、渡島アイヌとシャシベツの上に怖るべき敵が表はれた。それは石狩アイヌでもない、十勝アイヌでもない、奸佞邪智なシャモ族でもなかつた。

それはシャシベツが毎日駈け廻つて歩いた自然の駒ヶ嶽であつた。おゝ駒ヶ嶽！春、夏、秋、冬ともにシャシベツの母

であり友達であつた駒ヶ嶽が一時に鳴動を初めたのだ。そしてそれは七日目からは眞赤な血のやうな火を吐き出した。シャシベッは生れて初めて驚きを感じた、そして其驚きがやがて、怖れに變つて來た。カムイシャシベッは大勢の家來をつれて駒ヶ嶽に向つて突進した。然し一行が山の中腹に達した頃、怖しい火の流れがカムイシャシベッと、家來を呑みつくしてしまつた。

駒ヶ嶽の火は長い間燃えてゐた。今でもその煙が殘つてゐる、駒ヶ嶽は愚かなカムイシャシベッを待つてゐるやうに…………

（一九二一、一〇、一二）

村長殺し

片岡　厚

N村に村長殺しの事件があつたのは、丁度二年前のことであつた。「鬪の茶店」といふ茶店の少し先の雜木林の中で、新作といふ百姓が役場歸りの村長を草刈鎌の磨ぎすましたので、めつた切り斬り殺した事件であつて、其れはもうひんやりと薄暗くなつて來た夕方のことであつた。靜かな村の空氣は、かうした驚きの言葉で破られた。

『鬪の茶店の先の雜木林で人殺しがあつたゞ！』

『えつ！、一體誰が殺されたゞ？』

『殺されたのは村長さんで、殺したのはなんでも新さんだつてことだ！』

仕事歸りの百姓は皆な鋤や鍬を投げ出したまゝ、人殺しのあつた其の雜木林の方へ驅けつけた。男も女もそれから子供

等までが、皆な驚いてたゞ譯けもなく一生懸命に驅けて行つた。それで忽ち其の雜木林は人だかりで一杯になり、集つた人々は恐しさや嚴粛さに心をすたれながらも、震へる小聲で各自のとりとめもない考へを囁き合つてゐた。加害者の新作の姿は其處にはもう見えなかつたけれど、村長の死體は松の木の根本に莚を被つて横はつてゐた。小さい荒莚なので頭の方だけが蔽はれて、腰から下が青白くなつて現はれてゐた。また自轉車に乘つて役場から歸つて來たところをやられたものと見え、自轉車は血潮に染つて死體の脇の方に立てかけてあつた。子供等はずうつと遠くの方の藪蔭からもの恐しさうにかはる〲首を出しては其の莚被りの死體を眺めやうとしてゐた。さうかうしてゐるうちに巡査と檢死の役人が急ぎの自轉車でやつて來て、其の死體を村長の家へ運んで行つてしまつたが、この事件に關する驚きと恐れとを伴つたとりとめもない噂は、やがてこの村だけではなく五里も六里もあたりの村々に傳はつて行つた。村長が惡かつたから殺されたのだといふ者もあれば、反對に新作が惡いのだといふものもあつて、孰れが事件の眞相を言ひ現はしてゐるとも、思へなかつたけれど、更にまた或る人は孰れが正しからうが正しくなからうが、このやうな慘事を惹き起すといふことはよくないことだと言つた。しかしながら試し斬りをした昔の武士のやうに、誰も偉い人の生命を早や木のやうに心得て斬る人はおそらくない。人を斬る時には自分も斬られることを思ふ。『人を殺すのには自分も死を覺悟しなければならない。死は人間の最大事である。この最大事を敢てなすのには、またそれだけ大きな或は其れよりもより大きな何か動因がなければならない。では一體この事件の裏面にどんないきさつがあつたか。

新作は小柄なおとなしい男であるが、このやうな事件を惹き起したゞけにきかぬ氣の男である。以前は自分で作つて自分で衣食するに足る程の財産を持つてゐたのだが、被害者の德兵衛と所有地の境界のことで訴訟を起し、すつかり其れを使ひ果してしまつてゐた。全くの無一物同樣になり、家屋敷さへ自分のものではなかつた。從つて門や塀は雨風に曝されてひどく破れたまゝで柱だけがもの寂しく殘つて突つ立つてゐた。穀倉や馬屋のやうなものも一と通りは揃つて建つてゐたのだが、影も形もなく、母屋とて茅屋根が腐つて今にもずり落ちさうに傾いてゐた始末であつた。

兇行の前日のことであつた。ぽか〱照り出した鮮かな光が、廣いがらんとした庭に漂ふて、荒原の露がきら〱輝いてゐた。塒から放たれた鷄が、さうしたひつそりした庭を面白さうに走り廻つてゐた。其れを彼の人が短い棒で鷄小屋の方へと追ひ遣つてゐた。何事も起りさうでない平和な空の下で、『……ショ！……ショ！……ショ！………』と言つて、彼女は棒を高く揚げて鷄を脅してゐた。鷄は其の棒の下を快活なす早い足で走り廻つた。白いのが左の方

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

へ行くと。黑いのが右の方へ逃げて行く。其れをやつと小屋の方へ向けて追ひ遣ることが出來と、今度はまた別のが脇へそれて出る。こんなやうな具合で朝の勢のよい鷄を追ひ遣るのは、なか〳〵骨の折れる仕事である。そこへ新作がぶらりと出て來た。手傳ひに來たのかと思ふとさうではない。何か近所に用があるらしく、而も不氣嫌な顏をしてゐた。

『何處へ行くだかい』

『德兵衞どんへ行つて來べ』

『仕事の金かい』

『うん、仕事の金を貰ひに行つて來べと思ふだ』

『行くはいゝけんど、少しのことで喧嘩しねがいゝだよ。貧乏すりや無理なことだつて聞いてなくちやなんねだ。それに前の訴訟のことだつてあるだし、折角人が仲へ立つて與れていゝあんばいになつてるだで、少しのところは我慢ずるがいゝだよ』

『なにもよ、こつちから喧嘩を賣りに行くといふでねだ。仕事の金を貰つて來りやいゝだね』

『それんしても角立たないやうに話した方がいゝだ』

『………うん………』

新作は嫥に氣のない返事をしたが、心の中ではなるほどさうだと思つた。そして氣が進まないやうにぶらり〳〵出かけて行つた。

村の財產家だけに外から見たところでも屋敷は立派なものだ。大きな冠木門があつて、廣い屋敷にはぐるりと綺麗に刈り込んだ槇の塀が廻してある。其のまた塀越しには高い堂々として ゐる母屋の峰が見えもすれば、また朝日に輝いてゐる白堊の土藏が二棟も見える。なんとなくかう頭から押へつけられるやうな氣がして、鳴く鷄の聲にも誇らしげな小癪に障るものがあるやうに彼には思はれた。そして屋敷內から召使を呼ぶ德兵衞の聲がした。この聲は彼に急に不安を感じさせなんとなく行くことを躊躇させた。彼の前に出て無理なことを言はれるとすると、自然我慢がしきれなくなつて話が角立たないではゐないやうに思はれたのであつた。所有地の境界のことから爭ひを起し永年お互に仇敵のやうにいがみ合つてゐたのが幸、最近仲裁する人があつて仲よく打ちとけたのを、今またぶちこわすやうなことがあつてはならない、ぶちこわしてしまつたのでは、折角の仲なほりが何にもならなくなると彼はひかへめに考へた。それに今では昔の怨みを忘れて

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

自分は德兵衞の小作をして暮してゐる、小作だけではなく時々日傭取りにも行つてゐる、貧乏すれば無理だと思ふことでもおとなしく聞かなくてはならないこともある、またいつか其のうちに折を見て行くことにした方がいゝと思つた。そして『……えつへん！………』と不平げな高い咳拂ひを一つして、此家へ用があつて來たのではないといふやうな顏をして、德兵衞の門前を通り脱け、家へ引返して歸るのも氣まづいので、其の先の所謂關の茶店の方へ足を運んだ。小川の橋の袂にあるこの茶店の主婦は、彼の姿を認めると直ぐ聲をかけた。

『新さん、何處へ行くかいよ』

『何處へも行きやしね、時候のせいか氣がくしやくしするで、此處へやつて來たゞ』

『時候のせつておかしな人だ。今日は新さん日本晴れだよ。時候のせいぢやない、身體のせいだつペ。茶が出てるからこつちへ來て一杯えやつたえよ』

『あゝ……身體のせいかも知れねだ……』

彼はぼんやりした樣子をして茶店へ這入つて行つて、どつかり腰を下した。『この間の風はひでえ風だつたね』と主人が奥の方から言つた。『ひでえ風だつたね』と彼が氣のない受答へをすると、『あの風で今年は半作だよ』と主婦が言つた。『半作つてこともねだらうが』と主人が言つた。そして暫時の間は米作に對する風害の程度に就いて語り合つてゐたが、話はやがてこんなやうなところへ落ちて行つた。

『今度役場が出來上つたゞつてね。あんでも學校のやうに大きなもので、隨分立派なもんださうだつてね』

『そんな大きなものを何うするだらうか。始末に困るべがね』

『あんがよ其れがね其の、村長のしたことでこんな立派な役場を俺が建てたのだと、いつまでも人に言はれ度いんだね』

主人が用を濟んで奥から出て來て說明した。

『德兵衞さんのすることはそんなところだね』新作は小氣味よく感じないではをられなかつた。

『村の者がいゝ面の皮だ。なにも村長さん一人で金出して出來やしねだ。この凶作にまた村稅がかゝつて來るだね』

『コップで一杯え貰ふべ』新作はむしやくしやして來て言つた『金を持つてねけんど、其のうちにこの間の借りと一緒に屆けら』

『お前えがのは飲むと二杯えや三杯え行くだから、上酒でなくてもよかつぺ、えゝ新さん』主婦は貸しを氣にしてゐるや

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

うであつた

「あんでもいゝで一杯え貰ふべ」

新作は地酒のよくない舌の先へぴり〳〵来るやうなのを飲みながら、尚ほ村長の悪口を續けてゐた。

「强慾でずぶてえんだから始末にいけねだ、ほんとによ」

「さうださもさ、あんなに財産を持つてゐて、人の畑をせびるやうな奴だからね」

「新さんもひでえ目にあはされたものだね。もつとも强慾でなけりや金がたまるまいつて、金持は慾が深いものと昔から相場がきまつてるだ」

「さうだともさ、慾がなけりや貧乏するだ。百萬あつてもいくらあつても足りやしねだ。直ぐ貧乏しちまうだ」

こんなやうなことを言つてゐると、突然主婦が妙な手まねをしたので、新作も主人も驚いてばつたり口を結んでしまつた。チリン〳〵と自轉車の鈴の音がして、德兵衞のぶく〳〵肥つてゐる大きな五十面がひよつくり茶店の前の通りに現はれた。主人も新作もまごついてゐたが、一人主婦だけは相手の悪口を言つてゐた仲間とは思ひもつかない平氣さであつた。

「お天氣がよくてようございますね。旦那さん」

「天氣がよくて助かるだ」

「毎日役場もお骨折りでございますね」

「これも村の爲めだで仕方がね」

自轉車は橋を渡つて向ふの雜木林の中へ這入つて行つた。

「お氣をつけて……ふゝん!………」

主婦が苦笑した。彼等二人も苦笑した。

さて新作がこの德兵衞と法廷へ出て所有地の境界に就いて爭つたのは、前後四箇年もかゝつた。地續きの新作のところの畑を德兵衞が三坪ばかりせびつたのが事の起りであつた。勿論理屈は何うでもつくもので德兵衞に言はせれば、自分の家の畑を正當な廣さにひろげたのださいふのであつた。しかしながら昔から境界には目標として淺くはあつたが小溝があつたのだから、德兵衞がせびつたのだと言つて新作が怒つたのは無　がない。たとへ其の溝が德兵衞の畑をせばめてゐたとしても一應何とか言つてからひろげ可きである。それだのに新作へは何も言はずに、其の溝を越えて三坪ばかり侵略し

たところへ徳兵衞が細竹の柵をつくつて構へたのであつた。新作もこれをほうつて見てはをれなかつた。直ぐ行つて其の柵をぶちこわして、もとの溝のところへわざと太繩を張つた。するとずう〳〵しくも徳兵衞が其の繩を取りはづしてまた前と同じやう柵をつくつて構へた。それで新作はまた其れをぶちこわして太繩を張らなければならないと思つて出かけて行つた。ところが今度は物蔭に匿れてゐた徳兵衞が、いきなり飛び出して來て新作に撃つてかゝつた。そこで撃つたり撃たれたり組合つたり蹴合つたり烈しい爭ひになつた。そして其の場の爭ひだけは近所の人の仲裁で治まつたが、尙ほ治まらないのは畑の境界のことで、これが新作をして徳兵衞を訴へさせた。新作が訴へたといふことを聞くと、徳兵衞は早速人を立てゝ和解を申込んだ。しかし極度の憤激にあつた新作は、其れを聞き入れやうとはしなかつた。あくまでもどつちが正當であるかを明かにし　ければならないと言つて、彼は辯護士を二人まで賴んだ。かうまで事件が發展してしまうと、徳兵衞も其れに應じない譯にはゆかない、村の財産家でゐて村の世話役である身が、人の畑をせびつたといふことになつては名譽に關する、正當な廣さにひろげたのであることを實證しない譯にはゆかないと、この訴訟が不經濟な馬鹿馬鹿しいものであるといふことは考へてゐたものゝ、彼はいや〳〵ながら仕方なしに應じたのであつた。そしてこれがつまり四箇年間繼續した譯で、其の間にも徳兵衞は屢々新作に和解を申込んだが、新作は其ねを何うしても聞き入れず、自分の所有地は殘らず賣り、果ては家屋敷まで賣つて訴訟費用に當てゝ爭つたやうな譯であつた。

　この訴訟の最後の年のことであつた。初めのうちは新作の方が判決の上でずうつと勝つて來てゐたのであつたが、其の頃はもう全く訴訟費用か絶えて辯護士に離れられ二進も三進も行かないでゐた時のことで、從つて先方の辯護士にさんざん言ひまくられ、それ迄の形勢を根本からひつくり返されさうになつてゐた心細い時のことであつた。法廷へ出ると裁判官は、新作徳兵衞の原告被告を見下して、しかつめらしくかう言つた。『お前等兩人は近所同志でありながら三坪ばかりの土地で莫大な費用をかけて訴訟してゐて、其れが何になると思ふのか。田舍のことだから三坪ばかりの土地は、空地にして置いても知れたものだ。然るに二人も三人もの辯護士を依賴して、四箇年間も爭つて來た。眞に三坪の土地がほしいのなら、早くこの訴訟を中止し可きなのだ。この訴訟にかけて來た莫大な費用があつたら、三坪どころか立派な土地が求め得られた筈だ』それから新作の方を特に見て『和解しては何うか。お前に和解の意志はないか』と訊ねた。新作は辯護士に離れられ、先方の辯護士の爲めにさん〴〵言ひまくられて心細い狀態に落ちてゐたけれど、固く自分が正しいことを信じてゐたので、和解する考へなぞは少しもなかつた。それで『和解する意志は少しもない』と裁判官に言ふと、裁判官は

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

『では仕方がない。判決は次の法廷で言渡す』といふやうな意味のことを言つて閉廷にした。言ふまでもなく裁判官の胸の中では、氣の毒な新作が敗訴であることが判つてゐたのである。そしていよ〳〵裁判が決定し彼が敗訴になると、先づ徳兵衞が嘲笑の眼を彼に向けたばかりではなく、『三坪の土地に全財產をかけた男』といふので、村の一部の者は彼を嘲笑し出したのであつた。

闘の茶店から歸つて來た新作は、ほつこ出た酒の醉ひにものうい心を誘はれて、すり切れた疊の上にごろりと寢轉がつてゐた。『貧乏すりや無理も聞かなくちやなんねし、金がありや無理も通るといふもんさ、あゝ、實際おかしなことだ』と獨語のやうに呟いた。彼の嬶も彼が朝から酒を飮んで來たことを責めやうともせず、矢張りだるさうに言つた。『そんなことを言つて見ても仕方がねだよ』。新作も嬶も其の日は何もするのがいやになつて、さうして寢轉がつたまゝ無駄に暮してしまつた。かうしたことは彼等にはよくあることで、其の爲めに百姓仕事が手が廻りかねたりすると、そして田畑を荒すと、『お前ゑのやうな横着者にはもう小作をさせぬぞ。田畑を荒す小作人が一番始末が惡りだ』と徳兵衞に怒鳴られたりした。けれご彼等はいやな時に押して仕事をする氣にはなれなかつたのである。

夕方になるこ折りを見て行かうこ思つてゐた徳兵衞ごんへ新作は是非行かなければならないやうなことになつた。彼の嬶が抛り出すやうにかう言つた

『石油がすつかりきれちやつたよ』

『なくなつたら買つて來るがいゝや』

『買つて來いつたつて金がありやしね』

『石油買ふ位ゑなら佛壇の中にあつた筈だ』

『ありや昨日買物しちまつただがね』

『それぢや矢張り徳兵衞どんへ行つて來るよりほかねだ』

元來徳兵衞から取る仕事の金といふのは、一段步の田仕事を月半ばに仕上げて呉れゝば、普通の日當を支拂ふ上に、酒一升買つてもいゝといふ先方の言ひ出しで引き受けたのであつた。けれご勿論新作は其の酒がほしいなぞこは決して思はなかつた。酒は好きであつたから一升あればかなり貧乏してゐる咽喉を潤せるには違ひないが、そんな風にして受ける酒ならまるで毒のやうに口へはふくめないと思つた。其のやうな酒の爲めに牛馬のやうに一生懸命仕事をしたのでは、人の

口はさておき、第一自身が業腹でたまらない。それで其の仕事は月半ば迄に出來ないことはなかつたが、無理にも意地にも延ばし〱して日を送つてしまつた。で仕事が仕上げられたの二十日頃のことであつた。徳兵衛が其の際もう酒をひつこめて出さうとはしなかつたのは言ふまでもないことだが、受取つた金を家へ來てよく數へて見ると、普通の日當としては一圓五十錢足らなかつた。先の勘定間違ひといふものも、まゝあるものだと思つて、彼が娘を直ぐ遣つて糺して見ると勘定間違ひどころではなく、其れが先方が考へた相當な支拂ひだといふのであつた。思ふに徳兵衛の心では世間並な日當よりも安く見積つてゐて、浮き出た一圓五十錢で月半ばに仕事を仕上げることが出來たら酒を買はうと考へてゐたのか、それともまた月半ばに仕上げることが出來なければ、新作の方からあべこべに酒一升の代を出させる意りであつたのか、もし世間並の日當よりも安く見積つてゐたなら、月半ばに仕上げてたとへ一升買はれても其れは新作が自分で働いて買つたのと何の相違もなくなる譯で、買はれたのではなくなる。兎に角にも前の日傭の時は折角汗水たらして働いたいろ〱割當てのあつた金を、借金の利息に取り上げられ、今度はまたかうした不愉快なことになつたやうな譯であつて、それといふのも矢張り徳兵衛が強慾な上に訴訟のことがまだ腹にあるからではないかと新作は思つた。さう思ふと譯もなく興奮してむら〱した。こつちの心のきめやうでは貧乏してゐるからと言つて、何も無理なことを無理なことゝして聞いてゐる必要はないと思つた。もと〱無一物同樣な身だから、話が角立ち小作をさせぬ日傭にも來るなといふやうなことになつたら東京へでも行つて暮すまでのことだ、こんなところでこんな暮し方をしてゐるなら東京の方が遙かに氣がきいてゐる。苦勞の味に變りはない筈だと思つた。そして彼は今度は威勢よく家を出て行つた。

濃くなつて來た夕闇に外ではランプの光がそちこちに見えた、道端の草葉はもうなんとなくしつとりと潤つてゐて、蟲が頻りに鳴いてゐた。徳兵衛のところでもゝうランプがついてゐたが、徳兵衛の姿は家の中にも庭の方にも見えなかつた。たゞ竈の口から盛に出る赤い焚火の舌に照されて、召使の姿が見えてゐたので訊ねて見ると、裏の畑に出てゐるといふので、役場から歸つて來ると大抵こんなに遲い時刻まで畑の世話をする彼の丹精といふよりは寧ろ慾の強いのにあきれなら、そつちへ廻つて行つた。彼は野菜物に肥料を與へてゐるところであつた。野菜物に氣をとられてゐるし、其の上に暗くなつてもゐるので、彼は容易に新作に氣付かなかつた。勿論先から言葉をかけるやうなことのない人間なのだから、氣付いてゐても默つて知らぬ風を裝つてゐたのかも知れなかつた。

「旦那さん今晩は、暗くなりましたゞね」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「誰だい。だいぶ暗くなつたゞ」
「へえ、新作でございますだ」
「あゝ、新さんか。この間はひでえ風だつたね」
「ひでえ風でございましたゞね」
空には雲間から綺麗な星が輝き出してゐた。ぐうつ〳〵と夜鳥が飛んでゐた。新作はちよつと言葉の先を變なところへ持つて行かれてしまつたので、言ひ出しにくゝなつてもぢ〳〵した。けれど少しも躊躇することはないと思つた。
「旦那さん、日傭錢の不足を貰ひに來ましたゞ」
「日傭錢の不足つてあんのことだ、この間もお前えらが嬶が來てさう言つてたゞが、俺ら方ぢやあれ以上出せねだ、月半ばに仕上げて呉れゝば田の爲めによかつたゞで酒の一升も買ふだが、お前えが約束をたがへたゞでな」
「だつて旦那、考へて下さりや判るでせうが、わしは毎日一人前えの仕事は充分した意りだが、それに何うして世間並の日傭錢が貰えねでせうかい。これがまたあなたの方が金が今ねだで、二三日待つて呉れつてなら分りますだ」
「一圓五十錢や二圓のはした金がねぢやねだ。俺ら方ぢや請負仕事で頼んだ意りだ、それを月半ばに仕上げなかつたのはお前えのせいだ。月半ばに仕上げて呉れりや、田の爲めに　程よかつただか知れやしねだ」
「あんたは請負はせたとかなんとかむづかしいことを言ひますけんご、わしはそんな意りぢやなかつたゞ。それに仕上げが遲かつたと言つても、ほんの四日か五日ぢやありませんかい。其れがあんたの考へるやうに、あんで田に障るもんですかい」
「あれつきりやれねつてばやれねだ。うるせ！」
德兵衞は振り向いておどかすやうに彼を睨んでから、肥柄杓を取つて意地惡く野菜物に肥をやり出した。其れが如何にもこんな話よりも野菜物の方が大切だといふやうに思はれたので、新作はかつとなつた。
「其れはあなたが無理といふもんでさ。わしは貰ふ金を取りに來たのでさ。あなたが出さねつても出させるだ」
「あんで無理だ。文句言はねで歸えりやがれ」
「貰はないうちは歸えらねだ」
二人はもう全く興奮しきつてゐた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「其處らにうろ〳〵してると叩き殺すぞ」

『叩き殺すなら叩き殺して見ろ』

身體の大きな力のある德兵衞は、持つてゐた肥杓柄で新作に撃つてかゝつた。小柄な新作はよろ〳〵して目がくらみさうになつたが、心が張つてゐたので飛びかゝつて行つた。そして二人は組合つたまゝ畑の上から田の中へ轉げ落ち、ずつぷり濡れて、上になり下になりしてゐた。

總てこれは兇行のあつた前日のことで、翌日の夕方になると、額の瘤を撫でながら青いもの凄い顏をして、新作は鎌を磨いでゐた。がそんなに鎌を磨いで何をしに行くのかといふとたゞ草刈りに行くのだと言つてゐた。そしていよ〳〵磨いてしまふと、籠を擔いで出かけた。そしていつものやうに關の茶店の前へ來ると呼び止められたので、寄つて酒を一杯ぐいつとひつかけた。今時草刈りするなんておかしいねと主婦に言はれた。『豚小屋へ入れるに刈るだ』とまごつきながら言ひ逃れて、雜木林の中へ這入つて行つた。もと〳〵草刈るのが目的で來たのではなかつたのだから、籠は足手まとひにならないやうに脇へ抛り出し、松の木の根に腰を据ゑて鎌を引き寄せ、『一服してゐる』やうに見せかけて煙草に火をつけぷかり〳〵やりながら、德兵衞が村役場から歸つて來るのを待つてゐた。そしてとう〳〵彼をめつた斬りに斬り殺してしまつたのだが、德兵衞の息が絕えたのを見て、彼は直ぐ雜木林傳ひにＨといふ町に逃げて行つた。Ｈには彼の知合があつたので、其處で御馳走になり其の夜は其處へ泊つたのであつた。Ｈ町の其の知人は彼の兇行を承知の上でかくまつたのだといふ者もあれば、新作が餘り落付いてゐたので知らずに泊めたのだといふ者もあるけれど、事實は知らずに泊めたのではなくて、承知の上でかくまつたのだといふに近い。兎に角にも新作は此處へ一晩泊つて御馳走になり、また自分の　や親類なぞへの言傳へも依賴して、そして翌日は自首する考へでゐたやうであつた。ところが少しの時間の相違で、六人巡査がやつて來て三人は外を張番し他の三人が、何の言斷りもなしにどか〳〵と座敷へ上つて來て、新作に繩をかけた。そしてぶち擲りしながら彼を引つ張つて行つた。かくして新は作捕縛されたが、前には『三坪の土地へ全財產をかけた男』と言つて嘲笑してゐた村の人々は、今度は『こう〳〵新さんは生命をかけた』と言つて恐る〳〵語り合つてゐる。（をはり）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

火を點ず

小川未明

村へ石油を賣りに來る男がありました。髮の長い蓬々とした、脊のあまり高くない、色の白い男で、石油の罐を、天秤棒の兩端に一つ宛付けて、其れを擔いでやつて來るのでした。

男は、勤勉者でありました。毎日、缺かさずに、時間も同じやうに、晝少し過ぎると村に入つて來て、一軒、一軒、「今日は、石油はいりませんか」と、言つて歩くのでした。

其の男は、たゞ忠實に仕事のことばかり考へてゐるやうでした。それには、何か目的があつたのかも知れない。たとへば、金がいくら溜つたら、店を立派にしやうとか、また、はやく幾何かになれば幸福だと胸の中に描いてゐたのかも知れない。それとも、もつと差迫つた其日のことを考へてゐたのか？

あまり口をきかない、この男の顏を見たばかりでは、心の中を知ることが出來なかつたけれど、人間といふものは、何か目的がなければ、さういふ風に勤勉になれるものではなかつたのです。

もつとも、男には、若い嫁がありました。年をとつた母親もあつたやうです。小さな店だけで、石油を賣るのでは、暮しがたゝなかつたのかも知れない。

しかし、この村には、もつと〳〵貧乏の人達が住んでゐました。家根の低い、暗い小さな家が幾軒もあつて、家の中には竹串を造つたり、つま楊子を削つたり、中には狀袋を貼つたりしてゐる男も、女もあつた。それでなければ、一日外に出て圃に働いてゐるやうな人達でありました。

彼等は、物を問ひかけられても、手を休めて、其れに返答するだけの時すら吝んでゐましたから、頭だけを外の方に向

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

けて、

「まだ、今日はあつたやうだ」とか、何とか其の石油賣に言つたのでした。

「また、お願いたします」と、男は、軒下を去つて隣の家の方へ歩いて行くのでした。

其の後で、家の中では仕事をしながら、家族の者が、こんな噂をしてゐます。

「賣りに來るのと、行つて買ふとでは大變な異いだ。賣りに來るのは、きつちり一合しか量らないが、行つて買ふとずつと澤山くれる。これから夜が長くなるから、夜業をするのに少しでも多い方が有難い、晩方ちよつと行つて買へばいゝのだ」と、母親が言ふと、

「ほんとうに、きつちり一合しか量らない。なんだか足りないやうな時もある。來たのを買ふとランプの七分目位しかないが、行つて買ふとちやうど口許までありますよ」と、娘が返答した。

是等の人々は、かうして、何か問題が起ると互に口をきゝ合ふが、さうでもなければ一軒の家でも、めつたに話しすらせずに下を向いて指先を見つめながら仕事をしてゐるのでした。頭の中では、多分娘はさま〴〵な空想に耽りながら、また、母親は別のことを頭に描いて………

ちやうど其時、隣家の軒下では、男は肩から天秤棒を下して、四十前後の女房が汚れた小さな石油を入れるブリキの罐を手に下げて出て來ました。

窓の格子には、赤い唐辛子が十ばかり一房にして結び付けてあります。其處には、よく日が當るのでした。女の皮膚の色は青ざめてたるんでゐた、そして、水腫性の症狀があるらしく肥つて、殊に下腹が飛出てゐました。

男は、此方の石油罐の蓋を取りました。青々とした、强烈な香氣を發散する液體が半分程も罐の中になみ〳〵としてゐました。五勺の桝と石油を汲む杓があつて、男は其の杓を青く搖れる液體の中に差し込む刹那七つ八つの少年が、熱心に罐の中を覗いて、其の强烈の香氣を嗅いでゐるのでした。

「どいておくれ」と、男は、無愛想に言つた。少年は、一歩退いて、眼を細くして、雲切れのした秋の空を仰いでゐました。

「また、油が優が上つたんですね」と、女房は言いました。

「また、上りました」と、男は、答へながら、五勺の桝に殆んど過不足なく平らかに石油を滿たして斗漏にわけました。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

そして、もう一杯入れるために、また、杓子を石油に差し入れました。
「こんなに石油が高くなつては、夜もうつかり長く起きてゐられない」と、女房は、言ひました。
其の言葉の調子は、かう價が上つたら、どんなに石油を賣るものは儲かるだらうといふやうに聞かれたのです。
「卸問屋の方で價を上げるのですから、かうして賣る私共は、やはり儲からないのです」
無口の男は、言ひ譯をするやうに、たゞこれだけ言ひました。
女房は、かう言つたら、半杓位最後に、おまけを入れてくれるだらうかと、眼を皿にして、ぢつと見てゐたのですが、男は、やはり巧妙とでもいふやうに、過不足なく平らかに桝に入れて斗漏に移すと、其れぎりでした。
女は、むしろ男が早く斗漏を入物の口から拔いたので、青味を帶んだ、美しい雫がまだ殘つてゐて、却つて本に移されたのだけ損をしたやうな氣すら起つたのです。
「有がたうございます」と、言つて、男は、其の家の前から立去りました。
「賣りに來るのを買ふものでない。これからやはり、店へ行つて買つた方が得だ」と、女房は、獨言をしながら家へ入りました。
窓の格子には、火の燃え付いたやうに、この時唐辛子を日が照らしてゐました。
先刻の男の子が、石油賣の後を追つて行きました。
「僕は、石油の香ひが大好きだよ」
其の子供は、友達に出遇ふとさう言つてゐました。
「柿を一つあげやうか」
友達は、懷から柿を出して、少年に渡しました。二人の子供は、乾いた往來の上で、黄色な果實を持つて樂しさうに遊んでゐました。
其の間に、石油賣は、圃の間を通つて、彼方へ行つてしまつた。
日暮方少し前に、この笠を被つた、草鞋を穿いて脚袢を着けた勞働者は、村を廻はり盡して町に出やうとして、ある神社の傍にさしかゝり、其處に荷を下して、しばらく休んでゐました。境内の木々は黄色く色づいてゐました。
「寒くなつた。今年は夜着を造らなければなるまい」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

無口の若い男は、あたりのさびしくなつた景色　見廻はしながら獨語をしてゐました。
やがて、彼は、家に歸つて、日暮方に近づいて店頭へ來る客に、石油を量つて渡してゐたのです。
「歩いて行つて賣る時はおまけが出來ないが、店に來る人には、少しづゝおまけをしやう」
これが彼の心の掟となつてゐました。少しでも量の多いのを喜んだ、このあたりの貧しい生活をしてゐる人々は、わざわざ彼の店へやつて來ました。その中には、老人もあれば、若い女などもあつたが、日が暮れても、まだ仕事の手を放さない、ほんとうに一刻をも爭ふ其の日稼の人々は、子供を使にやるのでした。
此夜、幾百萬の燭光を消費する都會の明るい夜の光景などは、この土地に住む人々の殆んど其の話を聞いても理解することの出來ないことであつたのです。
男は、店頭に來た、汚たならしい風をした子供を見て、どこかで見たことのある子供だと思ひました。しかし、彼は、晝間石油の罐を覗いた子供だといふことは思ひに浮ばなかつたのです。
子供は、一合の石油を買つて、錢を傍に重ねてあつた空箱の上にのせて、小さな姿は店頭から消えました。
男は、うす暗くなつた光線の裡で、箱の上にのせてあつた錢を手に取り上げて、しらべて見ました。
「何、これは五厘錢ぢやねえか、五厘ごまかさうと思ひやがつて……」と、いま〱しさうに言つて、顏の色を變へた。
『おまけをした上に、ごまかされて、一合の頭でいくら儲かるけえ」
無口な、おとなしさうな男に似合はず、急に怖しい權幕となりました。男は、直樣驅け出して行きました。
「きつと、貧乏村の子供にちげえない」
彼は、村の方に向つて、恐しい勢で走りました。小さな子供の　油壜をぶら下げて、短かい着物の裾から出た二本の足に草履をはいて行く後姿を見付けると、
「オイ、餓鬼め、待て！」と、彼は、怒鳴ると殆ど同時に、子供の後襟を引捕へました。
もし、誰か村　者がこの有樣を見たら、あの平常口もきかない男に、こんな殘忍なことが出來るかと曾て想像の出來なかつたゞけびつくりするでせう。
「五厘ごまかさうなんて、不埓　奴だ」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「五厘出せ、それでなけれりや其の壜をよこせ」

少年は、黒い大きな眼を見張つて、顔を眞赤にして、何も言へないで震へてゐます。

「さあ、石油の壜を渡せ」と、男は、少年の手から引つたくる途端に繩が切れて、壜は地上に落ちて、倒れると石油は惜氣もなく、口から雲母の如く流れ出ました。

「手前見たいな奴は、大きくなると泥棒になるんだ」

男は、小さな掌で兩眼を擦つて泣き出した少年を後目にかけて、罵ると町の方を引返してしまひました。

神社の境内にあつた、銀杏樹の葉は、黄色く、ひら〳〵と既に、うす暗くなつた地の上に吸ひ込まれるやうに散つてゐました。少年は、いつまでも泣いてゐたが、急に泣き止んだ。そして、足許に倒れてゐる壜を拾つて、一目散に村の方へ走り出した。

「俺を泥棒と言つたぞ」と、口走りながら。

町に、燈火のつく頃でした。みすほらしい樣子をした老婆が。石油屋の入口に立つて

「さつき、子供が、五厘足りなかつたので、泥棒だといつて叱られたと泣いて來たが、私が錢を渡した時に目が悪いもので間違つたのだ。間違ひこいふことは誰にでもめることでな………」こ、老婆は、眼をしばたきながら、主人に言つた。

「いえ、五厘足りないと追ひかけて行つて言ふと、たしかに置いて來たといひなさるから、嘘を言ふことは、泥棒のはじまりだと言つたのです」と、平常無口の男は、白々しく答へた。

翌日の暮方のことです、男が、客のために石油を量つてゐると、不意に目先で火を擦つた者がある。ハッと心臓を刺されたやうにびつくりした時は、非常な爆音と共にもう火は彼を包んでゐました。

少年の不思議な犯罪として、この話は、いまだにこの町に殘つてゐます。

——二一、九作——

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

評論

西田幾多郎氏の「眞美の合一點」（哲學研究九月號）を評す

眞とは何ぞ、善とは何ぞ、美とは何ぞといふことは、すでに余等の興味の外にある。現代に生息する余等にとつては、現實そのものが第一に關心するものであつて、決してそれの假定せられたるイデアやアプリオリではないのである。何故に然るのであるか、余等は自我と全體との對立、及びその間の關係を考へる。そこに價値の概念が生ずる。この場合自我なり全體なりは、決して假定せられたる本體でなくして、現實に存するものだけである。カントは形而上學を破壞したが、しかし形而上學は決して死にはしない。それは常に變形して生きてゐる。現にあらゆる哲學者の努力は結局そこに歸着するからである。しかしながらかゝる形而上學の成立の第一の條件は、彼がとる立場の相違である。もしも存在が一つであるとするならば、立場は無數になければならない。これこの立場の存在を否定すれば、そこに本體論や、觀念論の立場が生れ、これらの立場の存在を肯定すれば、そこに實在論や唯物論の立場が生ずる、さうしてカントが與へた効蹟が第一にその時代の形而上學を破壞することにあつたとすれば、余等も亦現代の精神にかなはざる形而上學を破らなければならない。さうして今現に、かゝる立場の存在を肯定するものが、現代に於ける形而上學として承認され、之に反してかゝる立場の存在を否定するものが現代に於ては承認されないとすれば、余等が何故に本體論や、觀念論やアプリオリに對して同意が出來ないかゞ分るであらう。

價値とは一個の概念に外ならない。その概念は、余がくりかへして述べた如く、周知の概念である。價値の體原は關係認識の立場の異るところから無數にあると信ぜられる。しかしながら之をその依屬するところに附着せしめて考へるならば、結局三つとなる。即ち倫理的或は宗教的價値、論理的或は科學的價値、美學的或は藝術的價値である。ある人、例へばリツケルトの如きは、これらの外に宗教的價値を獨立させて、四つの體系に算へてゐるが、余はその然

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

るべき所以を知らない。もし宗教的價値を獨立せしめるならば、これと對立する多くの他の價値體原も各一つの獨立を宣言すべきである。余は後に述べる所の理由により、之をやはり倫理的價値の一にしたいと思ふ。

これらの價値體原は、生活そのものゝ發達から論ずるときは、決していかなる時代に於ても平等に並有してゐたわけではない、却つてある時代は常にある價値體原をその主要なる生活標準としてゐるものであるが故に、一價値體原が支配をとるときには、他の二體原は必らずその下に屈してゐるべきであつた。即ちこれは歷史的に考察することによつて更に明かとなるのである。但しそれは余の歷史哲學の一部を構成するので、こゝにはとても詳論する暇がないが、(一)一言にして云へば、生活はそれ自身の發展の爲めに主要動機を必要とする。(二)生活發展の段階は無限の連續である。(三)各段階は連續的不連續性即余の語で「種族」をもつ、そこに存在が關係するところの價値體原が發生する。(四)一種族内に於てはそれが當面の目的であるところの生活發展に對して、主要なる主要動機を有しその他の動機はそれの補助を爲す。(五)あらゆる存在は獨立性を有して、生活から外れる傾向をもつてゐるのである。

1、所でかういふ條件の下に於て、現實に余の考へるところの生活は、いかなる發展をなしたか。そこには平定的不變化性としての權威が認められる。即ちそこに權威を中心としての生活の發展があつた。權威が第一に歸着するものは神である。神は生活の第一の所產であると共に、次に之が人に於ては王となつた神及び王は古代生活の指導動機である。これがもつところのものが即ち宗教的價値でありさうして倫理的價値である、即ちその時代の生活の目標は第一に善であつて、それ以外の何物でない。それは意志の世界である。意志が中心となつて生活を進める世界である。

2、次の時代は權威が個人個人の上に落ちた時代であるそこに人は神及び王の存在を否定し、若しくはそれの現實的存在を肯定しても、なほその權威を剝奪するのに吝でなかつた。そこに於て意志の世界が理想の世界にうつゝた。それに必然に生活に於ける本能が理智によつて代られたことによつても證明される。さうして理智の世界が開いたのが科學的又は倫理的價値であつた。それが眞の形で代表される。即ちこゝに生活の目標がかはつて、從來何事も善のためになされたのが、今度は眞理のためになされるやうになつた。この時代に於ては、眞理のためにはいはゆる善を犧牲にしてもいゝのである。始めて、善が舊來の位置を保つたのには、善の概念の內容に變化が來さなければならない。そこに價値の顚倒があり、さうしてそれは現に行はれてゐるのである。

3、次の時代は情意の世界であつて、即ち藝術的價値、美學的價値が生活の主位を占めるのである。しかしながら

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

それは未だ來らない。

かゝる時代的考察によれば、例へば古代に於ても藝術が榮えたのは、如何なる理由であるかといふかも知れない。しかしその場合はたゞ生活の Nebensatz として有してゐたので、Hauptsatz ではない。このことは古代藝術を詳しく見ればすぐに分るであらう。また現代に於て藝術がかくも榮えてゐる理由もそこにあり、しかも藝術　今日生活そのものゝ主要なる動機でない理由も判明する。(余が從來發表したる諸論文「批評に於ける無價値の哲學」「批評に於ける立脚點としての余と個」「現代社會意識と藝術の將來」「勞働運動と智識階級」及び其他を參照せよ)

かくして例へば善と眞との合一とはいかなる意味なのであるか。西田氏が擧げられる例についていへば、余はかくの如き考に一致し得ない。余の考へる所によれば、存在は具體化されたる唯一のものである、故に一存在は必然的に完成してゐる(余の論文「古典主義の心理を參照」)へーゲルがディアレクティクの各段階と雖ども實はみな Synthesis なることは、他の一面から考へればすぐに分ることであらう。然らば、眞の探求に於て善と矛盾する場合に之を眞でないとするのは、やゝ絕對的見地に立つ嫌がある。余によれば古代に於て、たとひ眞のためにつくしても、それは眞でなく、實は善のためにつくしてゐたのである。ソークラテースが Nomos の大切なことをといて死んだことは、プラトーンによつてよく傳へられてゐるが、この例の如きは、正しく眞が善に劣ることを示してゐる。古代の世界觀は、現代の世界觀に比して大に異つてゐるが、それでも古代人の生活には差支へがなかつた、即ち眞であることは彼等の生活に必要でなく、善なることによつてその生活が統一されてゐたからである。さうして見れば、合一といふ事實は常にあるが、それはしかし一方が一方に負けて合一してゐるのである。古代に於て眞が善の犧牲になつたやうに、現代では、それがあべこべである。現代は科學的世界觀が生活を支配してゐると共に、それが眞であるが故に、道德も、藝術も之に屈せざるを得ない。現實が之を示してゐる。しかも存在の獨立性が時々現れてくるのであるが、生活の當然の段階が之を必要としない限り、これも亡ぶのである。現代は即ち眞の世界であり、理智の世界である。合一の事實は常にある、しかしその合一は、善と眞とが平等に合一したのでなく、眞が優位を占めてのことである。善すらもこの本來の概念を變じて、眞ならざる善は善でないことさへいつてゐる。これは宗教の內容が常に變ずるのといゝ例をなすのである。さうして善が眞と矛盾する限り、現代に於ては、善の內容が眞と同意義になるまで、變じないではゐないであらう。これが合一の事實である。

藝術の絕對抗がしばしば純粹經驗、或は直觀に於て理想とされる、このことは正しい。しかしながら純粹經驗の立

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

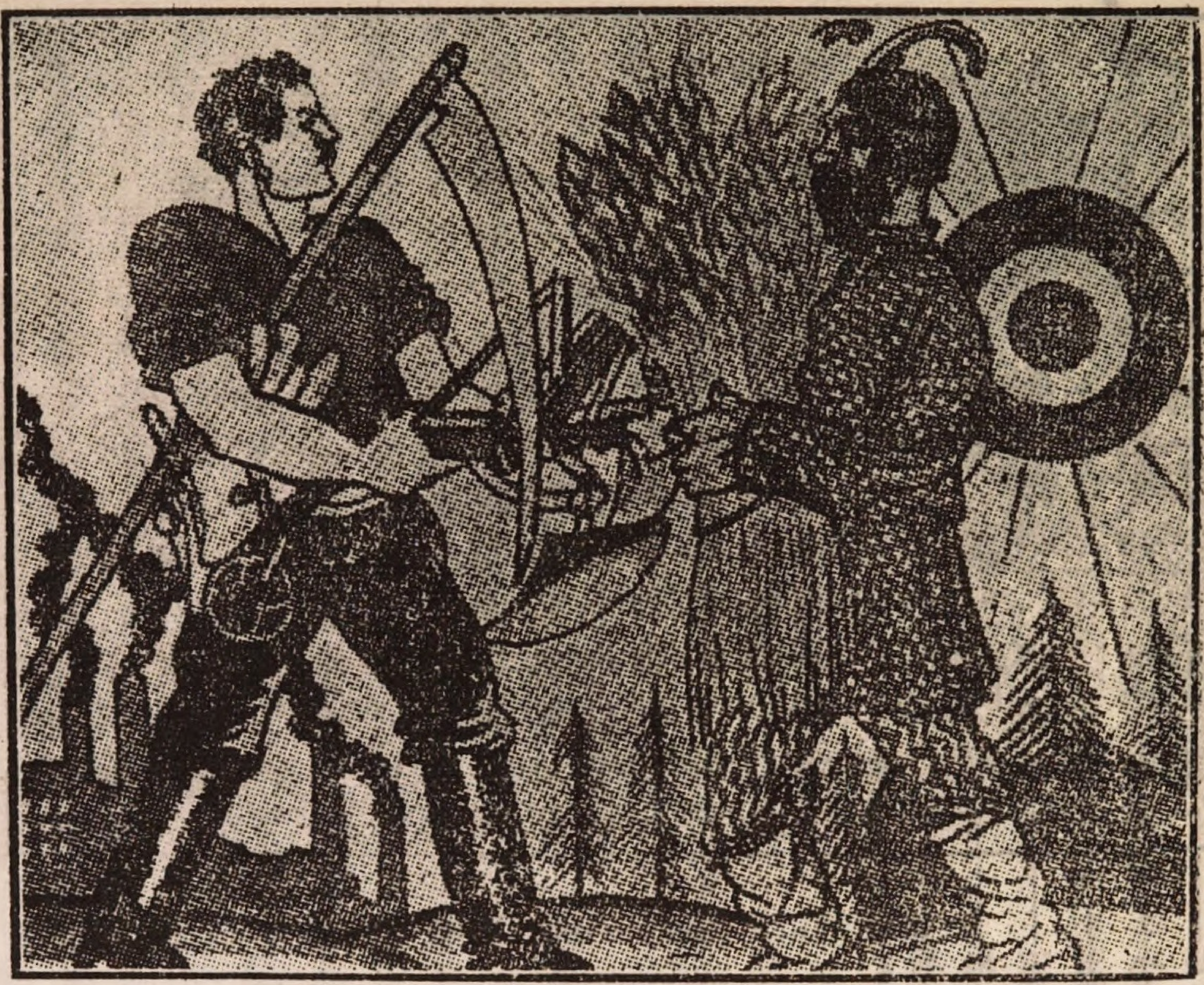
場はそれ自身論理的矛盾がある。西田氏が之を矛盾のないやうに解してゐるのは御手柄であつて、さうして氏の立場に立てば當然である。たゞかゝる境がいたづらに架空な形而上學に導かれるのが缺陷である。それは結局いはゆる宗教的さならないでは終らない。藝術が生活の主要動機として未だ來らざるが故に、それはしば〳〵回顧する。そこに宗教的な純粹經驗の立場が見出される。第三段階がしばしば第一段階に代ることは事實である、それは西田氏自身も明言される、さうであるからといつて、第三段階が第一段階であるさはいへない。情意の世界は善又は聖の世界に接近する、さうしてある種の革命が回顧的であるとすればこの立場も察すべきである。しかし事物を正しく見るのが哲學者の第一の任務である。さうしてその上からすれば、余は美の價値體原を未だ來らないとし、さうして現代に於て宗教的純粹經驗をそれの目標とすることに反對するものである。

以上述べるところによつて余の立場は明かになつたであらう。さうしてその立場によつて、西田氏のこの意味ふかき論文を見ると興味のさらに深いものがある。余は直接に西田氏を評しなかつた。その方が正しいと考へたからである。ことに哲學論文の評に於て然りであるからである。

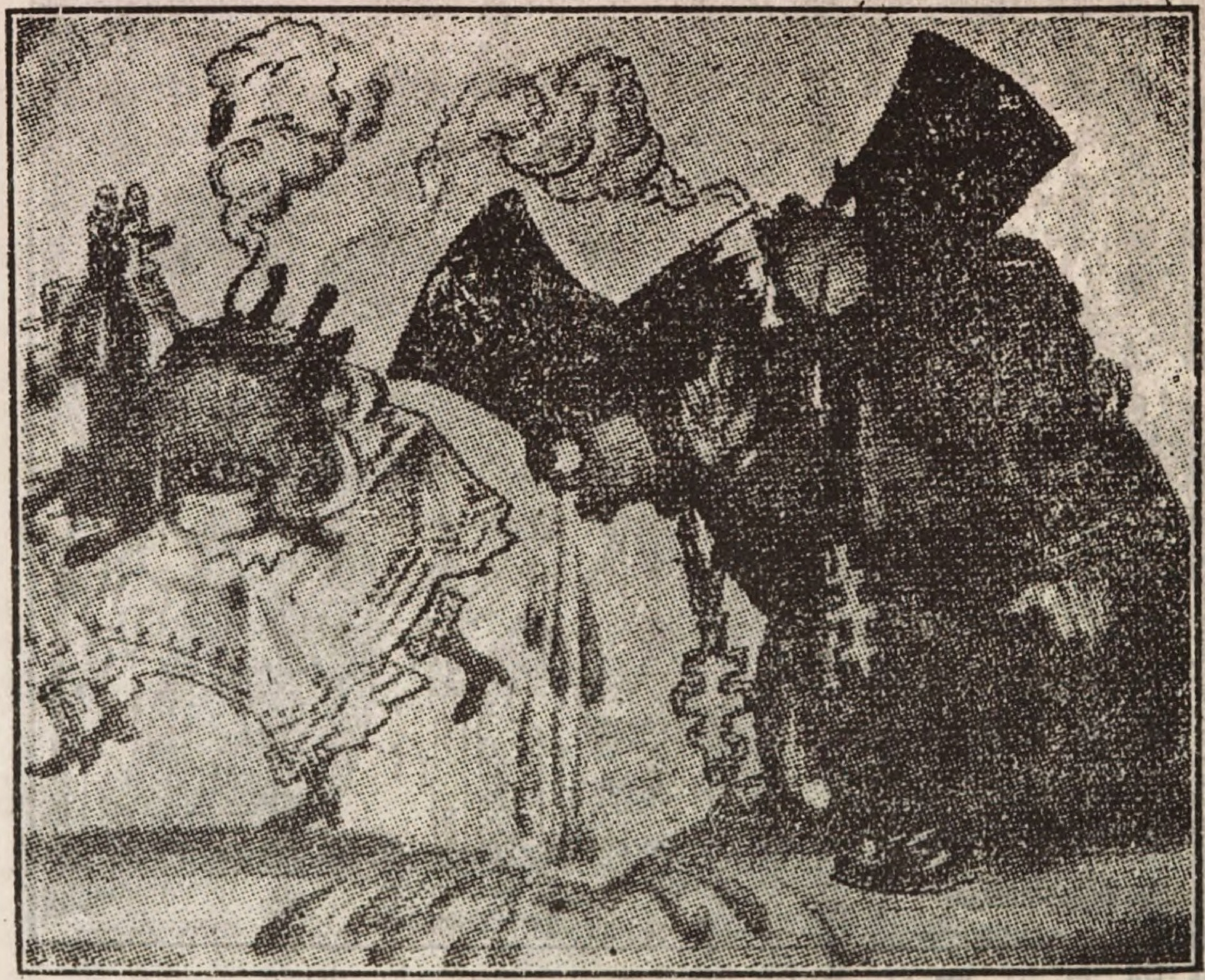
（正俊）

この一篇は原稿遲着のため間違つて此處へ組み込んだが、當然批評欄中のものとして讀んで戴きたい

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

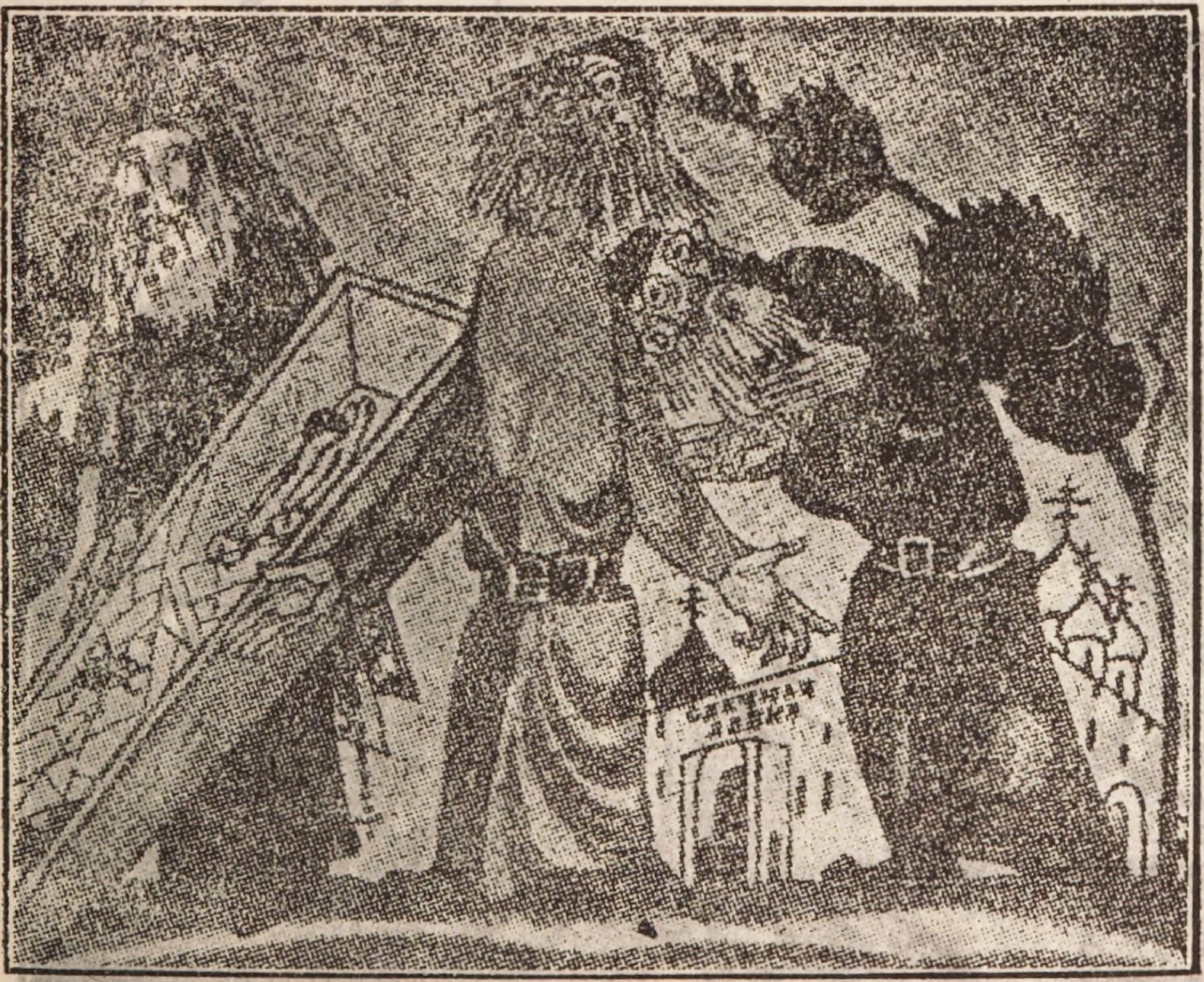


收獲の時



坊主の天國

種を蒔くには



坊主の本體

批評

――二郎
――弘二
――小牧
――正夢
――正俊
――孝丸
――洋文

評論 軍備縮小の徹底的主張

十月の中央公論は巻頭言を擴大して、軍備縮小の徹底的主張を堂々と支持してゐる。その堂々たる主張の一として、ブルジョア的良心の發露でないものがない。中央公論は近く開かるべき華盛頓會議は軍備縮小の協定を主題とする會合であつて、これを太平洋及び極東に關する複雜困難なる問題も附議せらるゝからとて主題を曖昧にしては不可ないといつてゐることは如何に同誌の軍備縮小の協定を重大視してゐるかゞ解る。中央公論は國家の防衛が兵隊と軍艦とばかりで動くものでないことを立證するために、自動車、ガソリン、石油の例を長々しく引用しゐる。そして、日本が最早や單獨でも緊縮の斷行に出でねばならぬ必要に迫られて居るの際、華盛頓會議の提唱に接し、偶然與へられたる好機を利用すべき地位にあることをもつて實に勿怪の事だとしてゐる、そのブルジョア的根性知る可きである。中央公論に依れば、各國共に、如何に苦しいからとて、單獨に縮小制限 斷行には出で兼ねるものださうだ。中央公論は國家主義の寄合であるところの華盛頓會議にどれ程の期待をもつてゐるか知らないが、單獨に縮小制限の斷行には出で兼ねる不決心で、行々しくも軍備縮小の徹底的主張などゝよく言へるものだ。しかし僕たちにとつて縮小が問題でない、僕たちはこんな議論をするものは中央公論許りでないことを知つてゐる。そして僕たちは常に我々の敵とする軍國主義を攻撃する軍國主義も亦我々の敵であることを覺悟してゐる。一旦劍を拔いて起つた者は、中途如何に闘爭の過誤を悟つても、我れひとり劍を棄つる譯には行かぬこと位誰だつて知つてゐる。たゞその時、劍が何處に向くかゞ問題なのだ。中央公論及びそれと同じ頭の人達はこれでも縮小の徹底的主張といへるか。（小牧）

短篇集『雨を呼ぶ樹』　小川未明著

この短篇集のなかに収められた短篇の數は總てゞ二十二篇ある。大部分は掌中に入りさうな程の短かいものが多い。そのなかの幾篇かを讀んで、茲に自分の感想を書くのだが、その選び方に誤りがあつて、すぐれた作を見落して、つまらない作を讀んで居るかも知れない。然しこれから自分の

云はんとする所は、その個々の作品に就ての批判でなくして、これらの作品を書かせた未明氏の思想そのものに就ての感想であるから、作品選擇の是非は大目に見遁して欲しい。

現代の讀書階級を風靡してゐるものは、何と云つてもブルジョア藝術である。從つて『眞珠夫人』の作者が『藏の中』の作者が、『桐畑』の作者が、而して彼等の末社どもが、藝術家としての名を瀆して生存し得られるのは、餘りに當然な事實である。ブルジョアの匂が骨の髓までも浸みこんだ青年には、勿論ブルジョアな藝術が投げ與へられなければならぬ。彼等は勝手に、そのブルジョア藝術を嚙ぢつて、甘い夢でも見て居るがよい。それを自分は敢て否定するものではない。

然し兎に角、自分だけは其等のものに倦き果てた。何とか云へば、直ぐテーマを持ち出す小說に、それから直ぐホロリとしたがる小說に……………

それで現代日本の藝術界とは、殆んど沒交涉の狀態であつた自分が、久しぶりで——實に久しぶりで未明氏の短篇を讀んだのだ。そして、それから受けた感じは、餘程自分の現在の心境に近いものであつた。未明氏の作品の背後に流れて居る思想には○○○的な色彩が、かなり強烈に塗られて居る。そして事象の觀方にしろ、考へ方にしろサンジカリストの主張と相近いものが感ぜられる。時にはそれが世の所謂常識家から批評させれば、『愚か者』としか云はないだらうと思はせる程に、單純な現れ方をして居る。然しそれが未明氏にとつて獨特な藝術境であるばかりでなく、不思議な迫擊力を持つて、讀者に迫つて來る。讀者はブルジョアの常識から考へれば(常識！この世で最も厭な語だ)不合理の世界に引込まれて、ほんとうは合理的な世界を其處で摑ませられる。未明氏は餘りに率直に眞理を語るが爲めに、その作品はブルジョアの敎育を受けたものから理解されるには、餘り緣遠いものとなつて終つた。

ブルジョア全盛のこの日本に於て、未明氏が流行作家とならないのは、當然の歸結である。

○○○的な思想、サンジカリストの主張に近い批判——これらの語で未明氏の作品を自分は批評した。そして現在の自分自身の心境に近いとも云つた。然し其處には尙ほ充分の物足りなさがある。それは未明氏が古くから——否本質的に持つて居る『夢の世界』である。

現代の○○○主義者が、この世の一切を肯定し、如何なる不合理をも合理化せんとする、あの物凄い努力を未だ不幸にして自分は未明氏の作品のなかに發見することが出來ない　資本家は吾々勞働者を絞る、だから吾々も資本家を○るんだ。彼等は吾等を○る、だから吾等も彼等を○る。彼等は吾等を○す、だから吾等も彼等を○す。そして彼等

資本家の行爲も合理的だ、道徳だ。そして吾等の行爲も合理的であり、道徳である。この徹底した〇〇的思想にまで、未明氏の作品が突進んだ時こそ、始めてプロレタリアの脈搏こ同じ鼓動をその作品のなかに感ずる時である。幾千萬のプロレタリアが、始めて自分達の代辯者を藝術家の中に發見した時である。

現在の未明氏は、この徹底〇〇主義的思想に到達の途中に於て、常に『愛』の名に依つて、『人道』の名に依つて、『夢の國』へ匿れんとしがちである。プロレタリアが欲してゐるものは、決して『愛』や『人道』ではない。彼等が獲得せんとして飢ゑ渇してゐるものは、〇〇〇さき反逆精神であり、飽くこごなき復讐心理である。『愛』や『人道』は、社會改良家と稱するブルジョア作家ごもに委しく聞けば、事は足りる筈である。

未明氏の身體に執念く喰ひ入つてゐる『夢の世界』が、ごれだけ未明氏の〇〇〇主義的思想の徹底を妨げてゐるかを思ふ時に、齒嚙みをしたい程の苛立たしさを感ずる。

然し何と云つても、現代のふやけた、遊び半分な、猪口才な小説かきごものなかで、珍らしく發見した一個の星である。自分は『雨を呼ぶ樹』の中の個々の作品を讀んでゐて久しく接しなかつた故郷の風物に面接したと同樣な感慨と喜びとにうたれた。この感じと喜びこそは、未明氏の作品が持つ眞實性でなくて何であらう。この眞實性は、何時かは未明氏をして徹底〇〇〇主義者たらしめることを、自分は固く信じてゐる。そしてほんとうに人道の戰士として、プロレタリアの語を以て、プロレタリアの思想を萬人の前に宣して呉れる日のあることをも信じてゐる。何故なら未明氏ほど常に眞實に思索し、行動してゐる作家を自分は知らないから。如何にその發想や文章が、所謂新技巧派と稱する一派のものごもの樣に、大道藝人の手際の如く水際立つた鮮かさを見せるでなく、寧ろその反對に、たどく〵しく不手際ではあつても、却つてそれが未明氏の强味にこそなれ、決して弱味にはならない。自分達プロレタリアが藝術と云ふ戀人から摑まんとするものは、その眞實の愛であつて、化粧されたゐ姿や、媚笑の影に匿された手練手管ではないのである。化粧や媚笑はブルジョアごもの必要でこそあれ、絕間なき『生の鬪爭』の渦中に投げ込まれてゐるプロレタリアの欲するものではない。

自分は未明氏が今一層現在の境地に徹底すると共に、世間のブルジョア批評家ごもから、『下手くその作家』と批評されんことを、寧ろ希望するものである。

若し〇〇的ユトピヤンとしての彼の姿を知らうと思ふ者は、短篇集『赤い地平線』と『雨を呼ぶ樹』を見るのが捷徑だ。

――一〇、五―(二郎)

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

小説「好色」

芥川龍之介　改造

僕は或る所で、芥川龍之介氏、宇野浩二氏との寫眞——それは大阪あたりで寫したものらしい。その寫眞の構圖などは知る人ぞ知るで、今此處ではつきりといふことは憚るが、その寫眞と『改造』十月號所載の『好色』を對照して見ると、それが又絕好の對照であることに氣がついたので、この評を書くに當つて、芥川氏には誠に、失禮であるが、此處に引き合ひに出すことにした。

事少なくも心血をそゝいで書かれた作品の批評を書くに當つて、寫眞のことなどを持ち出すといふことは、僕自身の修養の至らざるところで、何とも申し譯のない話だが、僕はその寫眞の氣持と、今度の『好色』を書かれた氣持との中に、不思議と共通した或る一點を芥川氏に見出したから、わざ〲僕の人格の野卑なることをさらけ出すやうであつたけれども、敢て此處に持ち出したのである。これは、勿論芥川氏自身には充分了解して頂けることゝ思ふ。その氣持といふのは、他でもないが、平中といふ隨分昔の題材をとつて來てゐながら、それが現在の芥川氏自身の實生活と何等かの奇緣があつて、結びつかれる——このところ少し當つてゐないやうであるが、要するに芥川氏自身の實生活上の或る惱みといつたものが出てゐやしないかと思はれるだけ、芥川氏にしてもが本統であり、（價値如何は後で述べる）——本意であるかのやうに思へるからである。

この點になると、同じく菊池寛氏の『俊寛』程に嘘がないだけ嬉しいのである。『俊寛』は月評子などにも大分評判がよく、僕等が物好きに異說を立てゝゐるやうに思はれるかも知れないが、僕は少なくとも菊池氏の作意を疑ふ。何うも信用の置けないところがある。言ひ換へれば菊池氏の立場だ。僕等の考へてゐることは、最早や描寫やテーマではない。菊池氏が俊寛が最後に島の生活に滿足し、都からの迎ひがあつても歸らうとせぬ氣持、僕はその俊寛の氣持は、俊寛自身としては誠であると思つてゐる。が、作者たる菊池氏と俊寛との距離を——作者自身の生活と、俊寛のあの場合の生活とを比較する時に、菊池氏が作をする時の氣持として、何處からかいゝテーマを持ち出して來て、自分流の纏め方で纏めたといふ以外に、實生活から來た惱みがないことを觀取されるのである。其處に菊池氏が人生に對する嘘があると思はれるのである。それは、マルクス學徒などが、唯物史觀を戴いて、原始生活に憬れるやうなものとは全然違つた、妙な胡麻化しが目につくのである。極端に言ふならば、『勝てば官軍』流の菊池氏人生觀にして、俊寛のあの氣持が、實際に、骨身に泌みて分りさうにもないからである。

それよりも、芥川氏の『好色』は、芥川氏自身に對して忠

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

實である。あの平中の生活は、今の芥川氏の生活――大宮人のやうな生活――と相應しい、或る共通の點がある。そして、一面から言へばこんな題材は、芥川氏でなくては書けない題材であるとも思はれる。白樺派の人達には馬鹿々々敷くて書けないだらうし、宇野氏が書いたら喜劇になるだらうし、近松氏などに書かせたら、それこそ厭味な悲劇となるであらうし、兎に角何といつても芥川氏の題材である。だが、如何にすつきりした品を望んでゐる芥川氏だつて、名文家の芥川氏だつて、こんなものを書くには少し早や過ぎるやうだ。年の六十にもなつてから、もつと色氣でもぬけてから書かねば、厭味が鼻について困つて終ふ。殊に、早熟の氏とは言へ、平中が待従の大便を嗅ぐやうな狀景を書くには、まだ〱早や過ぎるやうな氣がしてならない。こんなものは、實際のところ、六十位も越して、身體から色氣などがぬけて、枯淡、清灑、一點の俗氣をも去つて終つてからでなければ、書けるものではないと思ふ。

だが、一體僕等はこんな藝術を今の世に必要だとして認めねばならないだらうか。――何う考へても僕には必要だと考へられない。大體、なまじつか芥川氏が本なんかばかりに噛りついて、實生活を眺めないからこんな、遊びごとのやうな小説が生れるのだ。としか思へない。何うもそんな氣がする。要するに、生れ代つて來なければ、僕等が望んでゐるものは生れないやうな氣がする、僕等に、否我々社會の人々に、平中の色事をあゝだかうだと言つて聞かしてくれたところで、それが僕等の憧憬に何の與ふるところがあるだらうか。土佐派の繪が僕等には、歴史的な或る感銘を齎すだけで、それ以外には何の直接な響きがないやうに、芥川氏のこんなものは、一つは題材の解釋の仕方から何うも土佐派の悠長な密畫でも見せられてゐるやうな氣がしてならない。帝展あたりへ行けば、ごろ〱してゐる代物である。要するに、こんな藝術はもう不必要だから止めて貰ひたいのだ。勇退して貰ひ度いのだ。こんなものばかり讀まされた日には、人類はふやけて終ふ。僕が憎まれ口の代辯人となつて、芥川氏の藝術この世に不必要なりと申して置く。今時の雜誌編輯人や、頭のよい南文部次官などには、氏や菊池氏や谷崎氏のものが一番よいものであるやうに思はれてゐるのだから、新鮮な芽をふいて出て來た苗木などは何うも蹈られ勝になるのだが、そんなことでは枯れかゝつた老木が斃れて終つたら、大川は洪水ばかり出て困ることだらうと思ふ。

僕も一年 に年をとつて來ると、何うやら愚痴つぽくなつて困るが、この愚痴をなくしてくれる爲めには、芥川氏のやうな作家が我が國文壇にゐなくなつて、青々とした若樹が僕の眼を喜ばせてくれるやうになることである。――脫線を此處いらで止めるが、氏がたつた一つ救はれる道は、本なんてものを破棄して終つて、民衆の渦の中へ身體を投

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

け込んで終ふことである。或る人は社會運動を一時的といふ、又は藝術は永遠の生命といふ、——藝術とはそんなものではないといふ。が、人生は遊びではないのだ。遊んで暮らすには餘りに今の世の惱みは多過ぎるやうだ。だから、僕等はその一寸の期間でもよいから、尤も必要な、人生に尤も適切な仕事が仕度いと思ふのである。そして○○が遂げられ、○○の社會が實現された場合には、僕等の藝術は不必要になつて來るだらうから、その時はさつさと切り上げて繪でも描いてゐやうと思ふのである。

文章なんて如何に上手く書いたところで、時代が去つて言葉が違つて來りや、その精神だけしきや傳はらないぢやないか。僕は『好色』にも新技巧などゝいふ暇人の暇つぶしのやうな氣分が見えるから、敢てこんなことを言ふ。僕等の前には、名人糞喰へである。生活があり、眞實があつて始めて、名人以上の眞人間があるのである。名人になりたければ繪でも描くべし。

——馬鹿々々敷いから、此處いらで失敬する。（弘一）

劇壇近時

戲曲『新潮』の一幕物五曲

大家二人菊地寛、久米正雄兩氏、中家一人相馬泰三氏、小家二人武藤直治、金子洋文兩君併せて五人の一幕物がのつてゐる、菊地久米兩氏の作品は流石大家だけあつて何れも温泉芝居である、そして過去の戀愛が湯の香と情緒纏綿とからんでゐる、どつちの作品にも自動車云々とあり、カメラがあり、子供があり、女中があり、頗る上品である、そして深刻な哲學が全面をひきしめてゐる、ます／＼大家である、これで澤山である、僕も日々の畑耕一氏にならつて兩大家に敬意を表して沈默する、あゝ沈默の雄辯！

相馬泰三氏の『ソロモンの壺は』面白い材料である、つまらない生し方である、面白い壺である、つまらない惡魔である、面白い筆致である、つまらない漁夫達である。そして氏はます／＼中家である、僕は又沈默する、あゝ沈默の雄辯！

『山上の星』は武藤直治君の作品である、この作家はきつとまだ若い年の人に違ひない、でなければ餘り生活苦を知らない人に違ひない、若しくは、洒れを知つてゐて洒れの眞髓をつかんでゐない人に違ひない。

こんな憶測は非常に非禮であるかも知れない、而し作品を讀んで受ける作者の姿は、この三つの想像にぴつたりくる。

『山上の星』に書かれてゐる青年が語る死に對する考へ方は一種の輕い智識に過ぎない、この青年の言つてゐることを聞いてゐると、新刊の英書が眼にちらつく、そしてそれをよんでゐる元氣な青年が浮んで來る、彼は翌朝鏡を見る

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

自分の顔が眞蒼に見える（夜更をしたので）彼は死を肯定する、死を讃美する、彼は死の同伴者を考へる、女を、婦人を、そしてその日彼は友達と會つて愁はしげに語る

『死こそ正しき生活であるご』

私は決して作者を嘲笑せうとするものでない、作者の持つてゐるものは、凡て自分のものでない、星も停車場も青年も上品な婦人も、それは感傷の強い青年が無意識に拾ひあげる智識である、借着である、この作者は本當の作品を生み出さうとするなら、一切の借物をぬぎ捨てなければならない、チエホフの借着、シュニッラアの借着を捨てなければならない、そして裸になつた自分の心を眺めなければならない、その時初めて、小さければ、小さいなりに、大きければ大きいなりに自分のものが生れる。

『老船夫』は闇の中にも光のあることを象徴した劇である畑耕一氏の批評に從へば小仕掛にまとまつて居り、生命に何ものもふれてこない作品である、如何にもその通りである。

劇『死とその前後を觀る』

有樂座で再演された有島武郎氏の『死とその前後』の再演を觀た。この戯曲は今まで發表された氏の作品中一番良いものと思ふ。そして日本が生んだ近代劇中第一級におかれ可き作品であると思ふ。

この戯曲に對する批判はこれまでいろ／＼な人々に依つて論じつくされてゐる樣であるから自分はそれを繰返すことをさける。たゞ觀てゐる內自分の胸にはいつてきた疑ひについて言つて見たい。

この芝居を貧しい人が見たらどんな考へを起すだらう、（その貧しい人は社會主義者であつたらといふ譯ではない、寧ろ、それは主義者でないあたりまへの貧乏人の方がいゝ）そしてこの貧乏人が自分でもこの作品ご同じ運命をくゞつて來たのなら、彼はびつくりするに違ひない、そしてかう言ふに違ひない。

『この死んで行く奥さんも旦那さまも、まだ／＼不幸でない、幸な位だ』と、かうした考へは彼にとつては決して皮肉な考へでない、彼がこの作品に同感し、この不幸に一番同情したときに、彼はかう言ふより外に表現の言葉を知らないのである。

私は決してこゝで自分の隣にゐて涙をしぼつてゐた奥さんや、お孃さん達を笑ふものでない、私は彼女達の涙を是認する、と同時にこの芝居を見て感ずる貧しい人のかなしい言葉をも認めなければならない。

この貧しい人の言葉に對して作者は何も答へなくていゝものであらうか何うか、私はまたかう疑つて見た、勿論それをすゝめる權利なごは私に毛ごうある譯でない、けれ共、それは笑つてすまされることではないだらうと思ふ。何故

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

なれば、こゝに一人の觀客がある、この觀客が自分の劇を見て非常に感心した、心から魅せられた、けれ共彼に與へた内容が作者の内容と違つてゐたならば、作者は彼に對して答へるのは禮儀にかなつたことであるまいかと思ふ。

私のしたことは生意氣であつたかも知れない、私はこの貧しき人に對する作者の答へをこの劇の中に見出さうとしたのである。がそれはある程度までの滿足であつて、私の足はすぐに愛といふ作者の哲學に見事にさらはれてしまつたのである。

かなしい事である、愛は遂に最後の日の光榮である、愛は理想社會に於ける王樣である、生活を握つてゐる人が裸になつた時、愛はその人達にとつて絶對の眞理となる、けれ共、貧しき人間には生活がない、彼等が裸になれば爭鬪より外に途はないのである。

恐らく作者はこの事に就いて沈默を守る人であらうと思ふ。だが私は言ふ、若し人道主義の作家達が愛をモットウとして人民の中へ來るなら、彼等は先づ衣を捨てゝ戰士とならなければならない。

人民の爲めに生活を奪へ返せ、然るのちに愛は人類の光榮となることが出來るだらう。

種蒔き社の連中、僕は舞臺協會の演出を見て非常に感心したけれ共一人々々の批評は澤山の人達がしてゐるから私はさけたい、たゞ諸君に是非言つて置きたいことが一つある、僕達の主張する理想社會、換言すれば○○○○の社會に到達したら、舞臺協會の女優加藤光子氏を是非尊敬しなければならない、彼女に貧乏人の芝居をやらしたらきつとうまいに違ひない。だが、それまでに僕達や彼女が生きてゐるか何うかは頗る疑問であるが……

彼女は奥樣にむかない、お孃さんにも向かない、彼女にはビヨオルンソンの『フオルド娘』がよい、武者小路氏の『その妹』がよい、シユニツラアの戀愛三昧の貧乏音樂師の娘がよい、更らに一切の貧乏人の娘がよい、これは藝術家として決して不名譽でない、寧ろ大いに光榮とす可きである。

最後に伊藤松雄氏の微細なマネーヂに感心した。

歌劇ブルスカヤの歌
――にくい程浮氣者である――

私の見たのはロミオとジユリエツトとカルメンの二つである、ロミオとジユリエツトを見て私はさん〴〵惱されてゐたので、カルメンを見にさそはれた時、きつぱりことわりたかつたのである、けれ共おごるといふのにいやだとも言へず、ひどい雨にたゝかれて羊のやうに三等におしこめられたのである。

全く押込られたのである、二圓であるから十圓も八圓も出す人を羨望する譯ではないが、全く歌劇を見るのも容易な業でないと思つた。その代り三等は、なか〳〵人間味に

富んでゐる、私は椅子と座との中間に押込められたのであるから、前列にゐた若い女學生とは接近し過る程接近してゐたのである。かゝとの高い靴で二三度ふみつけられたが美しい襟足も見たことは見たのである。

私は押込められた口惜しさに、盛んに今度の歌劇を惡口言つたものである。『ロミオとジユリエツトなどは愚劣だ、背景が目茶苦茶なら音樂だつて目茶苦茶だ、役者に到つては勘彌と林千歳より惡い、コーラスは屑のよりあつまりだ、バンドマンの時よりマネージされてゐない、踊だつてさうだ、あれなら金龍館に出たロシヤ女優の方が遙かに上手い』などゝ、ありつたけの音樂の知識をさらけ出して毒づいたのである。すると私は忽ち烈しい反對の聲が前列の女學生間に起つてゐるのをきいたのである、『こんなにいゝ歌劇が判らないなんて、ずゐぶん低級な人だ、バンドマンなんかてんゞ比較にならない、淺草なんかきかれたものでない』と、そして最後に今度は高々と、

『ブルスカヤを惡口言ふ人があつたら、私は誰でもかまはず嚙みついてやる』とどなつたものである。

私はヒロリとして參つてしまつたのである。嚙みつかれたらそれこそ大變と沈默を守つたものである、そして世間の評判はこの邊にあるのだなと泌々感心したものである。

幕があいた、相變らずひどい背景である、が今度はロミオとジユリエツトの時とちがつてコンダクタアがいゝ、音樂が生々してゐる、同じ人々が演奏してゐるのだが、まるで感じがちがつてゐる、ハモニーは相變らずバラ〳〵だが生々してゐる、私はすぐ昂奮してしまつた。そしてカルメンに扮したブルスカヤの歌に、可なり感心したのである。

けれ共、結局彼女一人である、あとの人々はフアストクラスどころかセコンドクラスにも値しない、てんゞ感情が出てゐない、ホセになつた人は可なり努力してゐるが、まるで見劣がする、第一僕の感心しないのはステージが隙だらけなことである、鬪手場の入口の場面で、一人のダンサアがおしりをついたことを笑ふとは思つてゐない（おかしかつたが）てんゞコーラスが遊んでゐるのである。

寧ろ舞臺面を見ない方がいゝ、盲目であつた方がいゝ。要するに今度のオペラは盲目の人が、感心するオペラなのである。

けれ共、私はブルスカヤには今でも感心してゐる、彼女はにくい程カルメンである、にくい程浮氣者である、にくい程好きである、これは決して女學生に降參した譯ではない。（洋文）

童話集『太陽と花園』　秋田雨雀著

戲曲作家としての秋田雨雀氏が、十數年來、日本の山師

的戯曲作家の間に在つて、全く特異な位置を持つて來た唯一の人であることは、今更贅言を要するまでもないことであるが、これと等しく童話作家としての氏が、唯徒らに流行を追ふ現在の所謂童話作家の群からウンとかけ離れた位置に立つてゐることも亦、等しく吾々の認めるところである。

「童話」といふものに對する秋田氏の考へは、從來若くは現在の大多數の日本の童話作家の考へてゐることゝは大分違ふやうである。氏は、その最近の童話集『太陽と花園』の自序の一節に於て云ふ。

「童話は形式としては、大人が子供に讀ませるものであるが、もう一歩見方を擴げて考へると、大人が『大人自身の子供の性質』に讀ませるもの、精しく云へば人類が人類自身の『永遠の子供（エターナルチャイルドフッド）』に讀ませる爲に書くものだとも云へる」と。そしてこの『永遠の子供』とは、

A、何處までも發達して行かうとする性質。
B、自由でありたいといふ慾望。
C、美しいものを愛する感情。
D、正義を愛する心。

がそれであると說明してゐる。そしてこれ等の性質を有する『大人の子供』に讀ませる童話として書かれたものを集めたのがこの『太陽と花園』一卷である。

『大人に讀ませる』秋田氏の童話が、他の童話作家の作品と比して、最も異つてゐる點は、常にその取り扱ふ題目が吾々の生活してゐるこの現實そのものから發してゐるといふことである。

小說や戯曲と較べて、童話は遙かに永い生命を持つてゐる。これは小說や戯曲が當時の社會の表面的な出來事を取り扱ふに反して童話は、主として人類の永遠性を取り扱ふからである、とは、やはり秋田氏がこの書の序の中で云つてゐることであるが、然も前に云つたやうに、秋田氏の童話は、大部分現在の世界にその基調を置てゐる。けれどもこれは至極當然なことであつて、現在を離れた永遠はあり得ないのである。

偖、この集に收められた十篇の童話のうち、自分は、その代表的なものとして、『白鳥の國』『酒と瘦馬』『佛陀と戰爭』『監督判事』『牧神と羊の群』の五篇を選びたい。

舊時代の退嬰的な思想と、種族固執の偏狹な觀念とが、却つてその種族を滅亡に導く愚を嗤つたのが『白鳥の國』である。

『酒と瘦馬』では、聊かも人間生活の本質に觸れないで、唯表面的にのみ「改善」とか「救濟」とかいふことをして得意がつてゐる爲政者の無智と無能をユーモラスな調子で皮肉つてゐる。

階級といふものが生んだ愚劣な滑稽な、そして憫むべき役人根性を、『監督判事』一篇のうちに見ることが出來る。これは、作者自身もその初めに斷つてあるが、如何にもゴ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ーゴリの『檢察官』を想はせるやうなものだ。

平和論者としての、又非戰論者としての秋田氏の一面は『佛陀と戰爭』『牧神と羊』の群の二篇に現はれてゐる。

元來、秋田氏の童話の如きものが眞の童話であるか否かといふやうな議論を、自分は近頃頻々と耳にする。或る論者は云ふ。『若し秋田氏の童話を以て眞の童話であるとするならば、現在の日本の大部分の童話は童話でないといふことになる。同樣に、他の人々の童話を童話として認めるならば秋田氏の童話は童話でない。』と。

然しながら、斯う云ふことを口にする人々は、『童話』と云ふものを餘りに不自由な狹い形の中へ押し込んで考へてゐるか、さもなくば、從來の「をとぎばなし」風に、神樣とか、妖女とか、魔法使ひとか云ふもの丶みの出て來る荒唐無稽な造り話だけが、『童話』であるといふ風に考へてゐる人達である。

最近、勞農露國の文部人民委員ルナチヤールスキー氏が新しい時代の童話を募集し、それに大體次ぎの如き條件を附してゐる。

——童話は凡ての迷信を排したものであらねばならぬ。天使、魔女、惡魔といふたぐひのものは含まない方が良い。

——主として人類の將來、科學、技術、產業の發達及び勞働する民衆の生活等を題材とすることを奬める。

——神話的、又は既成宗教的題材はこれを避けることを要する。』

自分は、來るべき新しい時代の童話は、當然、このルナチヤールスキィ氏の募集條件と一致するところまで行かなければならないものと思ふのであるが、然も、今日の日本にこれをこのまゝ持つて來ることは愚である。日本の今日の讀書界へ、右の如き條件を具備した童話を投げ與へてもそれは何の役にも立たない。つまり、右の如き童話を要求するやうになるまでには、現在の日本人には、未だ〳〵仕なければならないことが無數にあるのだ。先づ〇〇とか〇〇〇とか△△とか云ふやうな現實的怪物から發して了はないことには、幾等民衆の生活を善く描き、神や佛のことを惡く書いても、更に利き目がないのである。そこで自分に云はせると、現在の日本の童話作家の價値は、最も強い感化力と最も迅速な傳播力とを持つてゐるその童話といふ武器を執つて、如何なる程度にまで、來るべき世界のために、新しい時代のために闘かつてゐるかといふことによつて極るのだ。今の日本の童話作家の大部分の人は、淺薄なユートピストか、でなければ安價な美や涙の享樂主義者である。さういふ童話作家の群から遠く離れて、秋田氏が全く孤獨な地位にゐることは、寧ろ當然のこと丶云はねばならない。そして、斯の如き日本の文壇に氏のやうな童話作家

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

を得たことは、吾々の深い悦びである。（孝丸）

新作詩集『樂園の途上』　白鳥省吾著

僕はほんとうのことを言ふと、詩の批評などは嫌だ。僕はだまつて、詩人から受けた感じを自分のものにしたい。それを大げさに發表することは、自分の感じを人前にさらすやうな氣がして何んとなく辱かしい。さうなると人の感じである詩を第三者が批評したりなどすることは出來るものか、どうか頗る疑問に價する。

白鳥省吾氏の詩を讀んだ時、僕の第一に感じたことは、氏の民衆詩人として、上品な氣持を表はすことである。日本の詩人はこても外國に見られないほごの上手さをもつてゐる。その意味から言ふこ、省吾氏はこれらの上手な詩人たちに比して、その上手さ加減が少し許り不足かも知れない。しかし、僕の白鳥氏を好きなのが、そこだ。省吾氏以上に上手に進む詩人は、例外であらうが、多くこつたものになり易い。

省吾氏は自分の心の奥で思つたここを言ひ現はすために決して、血とか、火とかいふおそろしい言葉を用ひない。省吾氏は平氣で、しかも平凡らしく「それなのに間違つた制度で彼等を蝕ばましてはいけない」こか、また「御國のために命を惜むなと一家の働き手の壯丁がみんな招集された」とか平凡らしく言つてゐるが、それが讀む人にこつては、その何氣なくいつてゐるところに可なり強いものが見える。多くの詩人であつたら、そこに默つて居られない燃えた感情の強烈な發露がなるに相異ない。それの見えないのが僕の省吾氏の好きなところかも知れない。何故なれば僕にはあまり燃えた感情があり過ぎてならない。そして、自分の缺點を最も現はさない人が、弱點をもつた自分にとつて、強いものになつて見える。僕は「樂園の途上」中、立場が立場であつた故(せい)か、もつこもよく「搖籃の郷土」に感じた。そして、この一部の詩に感じた氣持を書いた次第だ。

僕はまた白鳥省吾氏と會つたこともなければ、また、そんなに多くの詩を見たものでもない。が、しかし、こん度警視廳に行つて、とんでもない白鳥間違をされて、この詩人とは遠からぬ縁故をもつやうになつた。だから、こんご省吾氏の詩のここを書いてゐて、どうも全然知らない人でもないやうな氣がした。僕のもう一つ言ひたいここは、白鳥省吾氏の書いた詩を見た感じと印刷になつた詩の感じだ。これは、こん度、計らずさう云ふ機會を得たのであるが、福田正夫氏こ全く異つた感じの下におかれてゐるやうな氣がする。正夫氏の詩は印刷になつて現はれてゐるより原稿紙で見た方がよほど強い。そして省吾氏の方が、これが反對だ。こんなここを言ふと讀者はつまらぬだらうが、編輯に當つ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

た僕にはさう感じられる。僕はことに詩に於てさうであるが人のいふものを見極めたい。そしてほめたい。そして又生させたい。詩に於て何よりも先づ僕は感じを尊ぶ。表現が未來派であらうとごうと、そんなことが僕の問題でない。どんなに上手でも、虚僞(うそ)があつたり、誇張したものであつた、らそれは僕の敵と知れ。（小牧）

美術 二科・院展・帝展評に代へ

人間が物を造つたに物が人間を支配する。此の事實は現在生活の總てに存在してゐる。

集團機關とはもと〳〵人間によつて造られた生活方便である。是は常に破壞の流動によつて創造的前進をなし、これによつて人間自身が人間として物の上にあり得るゝのである。此の不斷なるべき破壞が杜絕されたる場合機關は腐敗し、物は人間を支配する。人間が物の支配下にある時此の人間共は既に無反省なるゆゑの證明にある。

而し此の場合人間の機關であるべき集團の何處かの分子には當然自覺本能が起きべき筈である。自覺本能とは常に不利なる立場にある人々に起くべき現實意識である。必然壓迫されたる物へ反逆するに失はれた創造前進の素、破壞心理を取返すべきである。此の場合有利な立場にある多くの他の無反省分子は又無定見意識の本能として現在を固守し擁護するであらう。此の時、最初物の支配に向つて反逆すべきであつた不利な自覺級の人間は、物を擁護するの人間なるこの前衛に向つてまづ反逆する。反射的の無自覺的本能とは知り乍ら物に對するにそれらの人間彼等をもつて換へた。物に對する破壞の手段はつひにそれら人間に對しての革命手段とはなつた。

而し此の同じ自覺級の範疇にありながら此の手段を此の圈外へと求める即ち集團生活を否定し內なる個人的生活へと失はれた人間の久遠を盛らうとする人々がある。

是に相當する人々が畫壇の集團に於る場合には、極少數なるに而も自覺級全部を收めてゐる。畫壇さは自覺級が既に消極的に此の通りな集團機關の逃避否定に圈外なるが故に事は簡單である。畫壇の集團機關さはいつまで待つも無反省無定見者の群許りが眠りの集團である、に何の不思議はない天下泰平の永續である。物がいつまでも安眠を人間の上に食つて行く。展覽會とはこうした形骸そのものである。畫壇と云へば是がひとつに代表してゐるのである。

若し外に逃避したる極々僅少な撰ばれた能動的自覺者があつたとしても、それは現在の馬鹿々々しい無定見なる物の形骸なる畫壇の外に遙か圈外の大本へと反逆の大眼は延びて行つてゐるであらう。又は更に畫壇とは觸れ遠い社會運動の眞中へと行くべきが一方の當面なる道である。

物がいつまでも安眠を人間の上に食つて行く。人間は終に時間と共に物の中に物の同化となる。展覽會とは斯くし

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

て既に死滅してゐる、物以外に出でない者のみの人間によつて厖大な生命を保持してゐるものに過ぎない。物となつた人間に反省的生活意識のない以上、現代の惡社會相が彼等自らによつて光を失つた彼等の藝術に全無意識に反映され盡してゐるべきも當然である。此處に至つて問題外の厖大な畫壇の機關も惡を寫した憎むべき毒塊とある。而し物なる物の鏡なる是は矢張惡社界の破片に過ぎない。物なる鏡を破壞したからとて寫相の本體が破壞されて行く譯ではない。要するに問題は大きい社會惡の元因に行くべきで、嚴肅に展覽會評といふものは斯くして增々無駄の無駄であることが判然して來た。初號に二科院展評の書けなかつたのも此のダルな理由による。無駄なるものも事實には存在する。本文が尠く共展覽會評に換へられたる關係上最後に蛇足を加へておく。

上野の竹ノ臺陳列場は建物からして安物の公設市場然としてゐるが、是は集團機關の營業化された、作品の商品化して來た二科、院展、帝展としてはそれは當然好格なシムメトリーである。展覽會を此の一個の物として、集團の營業機關として見る時、藝術批判として根元的には無價値なものでありながら、二科、院展、帝展と三軒を比較しては夫れ〴〵面白い對照がある。皮肉にも色彩感覺の上から社會的快感の効果をはらしてゐるのが舊型の帝展であるのは何故か。蓋し又快と不快、即ち社會的と非社會的の感覺的巧利以外に、觀るべき展覽會は展覽會そのものとして以外に嚴肅さは藝術批評へとは出でないものである。(是は短かく十月「我等」にある）新聞で見てゐると萬鐵五郎君や漫畫家の池部君や岸田、河野の草土社の連中などが帝展へと出品したらしい。一寸こそばゆい頬笑がこみ湧いて來る。

この儘此の先へ延べてゐると折角の嚴密さが失せてそれでなくてさへ尻のしどろもどろになつた本文が、與太の道へと入りさうなので筆を擱くとする。言へない口からもとらぬ口付で簡單ではあるが漸く是だけ言ひのけて了つた。矢張り言葉はだるい。——十・十——(正夢)

映畫

民衆と映畫

民衆藝術の爲めに不斷の叫びを放つてゐる平林初之輔氏は、『活動寫眞に至つては近代の產物だけに、ブルジョアの宣傳の道具としての色彩が極めて濃厚である、その題材は多く財產に關したものである』と言つて、民衆との交涉を輕く見てゐるが、私は氏などゝ、まるきり違つた見解を持つてゐる。

映畫劇の大部分、まして民衆に喝采されるやうな映畫はその根底は單純な宿命か、因果應報である。

思想を行爲に統一しやうとしたもの、または一つの主題の提供にこしらゐられたものは少しく高級に屬する。

大概はありふれた運命が題材となり、(活劇などはわけて

さうだが）かならず惡と善の太い線を引ひて、若い男女の戀がからんでゐる。戀愛に生きる若い男女は觀客の同情を惹くやうに善人が多い。

たとへ、假りにその題材が多く、ブルジョアの讃美や、宣傳であるとしても、その映畫劇が民衆の心理にどんな風に反映するかといふことを考へないで映畫をけなすのは輕卒をまぬがれないと思ふ。

民衆に反映する善とは、虐げられてゐる人のことである映畫にあらはれる不幸ものや、弱者は、民衆の本然のすがたであるところの善良さと、ぴつたり握手する。虐げられてゐるものを、助けやうとする勇敢な青年に、隨喜するのは、彼等が虐げられてる生活から、脱出しやう、脱出しやうとしてなし得ないあこがれが、さうした勇敢な青年の行動に依つて滿足さしてもらひ、感情の發散を感ずるのである。

惡を倒す瞬間ほど、彼等が歡喜を感ずることはないであらう。その人間、彼等の、底深くおしこめられてゐた『赤い血』が奔るのだ、民衆にとつて、題材や結末などはどうでもいゝのである。

惡を倒す善に狂喜し、滿たされないでゐる性や――戀愛なくして結婚したものがせめても、場面の展開に依つて飽滿をむさぼるのである。

民衆が求めて、不斷に求めて、死ぬほど求めてもあたへられないものが、映畫では、立派にあたへられる。

權力階級の爲め、資本家階級の爲め、はては不可抗な運命の爲め死ぬほど求めてもあたへられないものが、映畫ではあたへられる。

彼等が手のとゞかない理想としてゐるものが、たとひ感情だけでも、人間々々に滿されるのである。その滿たすことは、發散そのものだ。

民衆が、映畫劇を見てゐる瞬間は、まつたく本然の自己をむき出しにするのである。

尊むべき彼等の單純は、そこで憤怒し、痛快を感じ、愛し、憎み、絶叫し、號泣し、快笑するのである。

彼等の理想境は、或る場合には、常設館にありと言つていゝ。解放された彼等の生活が、常設館内だけで、辛うじて見出されると言つていゝ。

映畫を見てゐる時、民衆の心理は皆一樣にうごく。彼等が本然の自己にかへるこころから、何時の間にか單純に結合して了ふのである。そこには階級意識を脱却した、平等の世界を現出する。

かうして、本然の自己に立返つた民衆に、眞實の生活はお前達のうちにありと、敎へてゐるのが、映畫であり、また敎へるのが映畫でなければならない。

最も架空的な、ロマンチックな世界も、映畫の持つてゐる使命でもあらうが、私の願ひは、最つと現實的に完成さ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

れてゆくことを望むものである。

映畫の持つてゐる藝術的境地は、現實的になるにしたがつてその光輝を放つべき筈である。それは現在の、民衆の生活と最つと切實に握手しなければならない。

若し映畫劇が、綜合藝術でありとするならば、現實的となればなるほど、完成されべき筈である。

完成された映畫劇は、かならず人間の眞のすがたを見せるべきものだ。

民衆が、感情の發散以上に、驚愕して自分の眞のすがたを凝視する時、そこではじめて民衆は救はれはじめるのである。民衆は戰ふか、握手するかを覺るのである。

映畫劇の完成は、必然、ブルジョアの心臓をゑぐる、△△ともなるに違ひない。

彼等の罪悪は、如何に戰慄すべき場面となつてあらはれ、彼等の生活が如何に虚僞であるかを覺らしめるか知れない。彼等の醜悪をも、如何にあざやかに露出することだらう。

映畫の眞劍な發達は、やがて民衆を救ふものであることを私は高唱せずにゐられないのである。(賢三)

寄贈圖書雜誌

壞人。演藝。新詩人。炬火。社會主義研究。石盃。ふらんす。無明。

ベルリオ自傳と書簡(尾崎喜八譯)―叢文閣。

樂園の途上(白鳥省吾著)―叢文閣。

佛蘭西印象記(吉江孤雁著)―精華書院

太陽と花園(秋田雨雀著)―精華書院。

幻滅の彼方へ(加藤一夫著)―春秋社。

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

世界欄

ロシアの饑饉と世界の藝術家

世界の藝術家たちは飢えて死ぬロシアを默つて見てゐない。僕たちも日本の思想家に訴へやうとしたが、少し調子が高かつたそうで、あんな目にあつた。しかし、この叫びは世界共通の叫びだ。ヨーロッパの藝術家は世界の人々に向つて、次ぎのことを言つてゐる。「ドストイエフスキー、ゴーゴル、トルストイの文藝界に放つた光は人間の心と理智の中にかがやいてゐる。これ等の人々は聖地ロシアに現はれた恒星であつた。我々はこれらの人々に對する負債としても、饑餓に惱むロシアの人々にパンと醫藥と衣服を與へればならぬのだ。救濟は急を要する。そして、早い程二重の効力がある」。以上は撒文の一端であるが、次の人達がその署名者である。（獨逸）Kaethe KOLLWITZ, MOISSI, Alfons PAGUET, Max BARTHEL George GROSS（英國）BERNARD SHAW（米國）UPTON SINCLAIR（佛國）Henri BARBUSSE, Anatole FRANCE（瑞西）Prof. FOREL, Prof, VOLKAERT（和蘭）Henriette ROLAND-HOLST（露國）Maxime GORKI, CHALIAPINE（瑞西）TURE NERMAN（丁抹）ANDERSEN NEXO。

ブロックの死とロシアの革命詩人

アレキサンドル・ブロックは八月七日の日曜の朝ペトログラードで死んだ。革命詩人を失つたことは、ひとりロシアのみではなく世界の藝術家の不幸である。僕たちはこの悲しみに對して心からの哀悼の意を表する。

ブロックの作には常にミスチックな感靈がひそんでゐる。それでゐて、宗教的象徴主義に囚はれてゐない。だから他と異つた光りかあつたといへ得る。ブロックは、また、決して職業詩人ではなかつた。彼の詩の中には多くのアカデミック詩人のうたうやうな愛國的詩調もデダクチックな詩調もなかつた。彼はものに動じ氣の動くままそれから受けた感じをそのまま歌つたのである。だからブロックが、またと得がたい「十二人」と「スキフ人」を革命ロシアに遺した。これらの詩は革命に對する心からの叫びであつた。「十二人」は十一月革命の際の十二人の赤衛兵をうたつたものであるが、この有名な詩の譯は、すでに我國で二三の人達によつて紹介されてゐる。「スキフ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

人」は平戸氏の譯になつて十月號の「炬火」に發表されてゐるが、そもそもスキフ人はヨーロッパとアジアの境堺に住む野蠻人であるが、この詩には深い意味が含まれてゐるやうだ。もし、古いヨーロッパがウラルとヴォルカに住むスキフ人の希望の心を解つてくれぬなら、スキフ人は、ヨーロッパと手を切らう、そしてアジアにすべての期待をかけようといふのである。ブロックのいふ野蠻人は、とりも直さず革命を起したプロレタリアであり、農奴である。そして、この叫びを聞き入れぬのが古いヨーロッパ即ちブルジョアのヨーロッパである。かうしてヨーロッパの頑瞑な思想に、すつかり失望したこの革命詩人は、アジア、未來の輝いてゐるアジアに何ものかを求めやうとするのだ。ああ、アジア、おまへはほんとうに起てるか。

ロシアにはかういふ革命氣分の詩人は決して少なくないやうだ。僕たちの知つてゐる範圍で、革命を否定してゐる詩人は少數者だ。このグループに屬するものに、Maria Isvè afeva と Balmont がゐる。Maria Isvetaïeva の非凡の天才はルナチヤールスキーですらそれを認めてゐる。確とした信念からではなく、事實としてのこの大變に無關心で居られなかつた詩人に、Via'cheslar Kovaleosky, Boris Pasternak, Viatcheslar Ivanoff, Valcchine, Anna Achmatowa がゐる。また、ロシア革命を宗教的功績と見做してゐるものに、Andre Béliy 及び農民詩人 Serge Essenine がゐる。Alexandre Block なども、このグループに屬さないものでもない。最後に十一月革命を無條件に是認し、共産主義を讃美するものに Valiëe Brussov や Maiakovsky がある。ここに「戰爭と宇宙」及び「人」及び「進軍歌」の作家として知られてゐる Maiakovsky の、

大洪水の水で
世界の都市を洗はう
われらの神は「馳け回る」ことだ
われらの心は太鼓だ

の句は民衆の知らないもののない程有名な歌だ。かうしてロシアの民衆詩人の多くはこの革命で自分たちの立場をあやまらなかつたのである。

エスペラント大會と階級闘爭

八月中旬プラーグで開かれたエスペラント大會には約四十箇國の代表者が集つた。その結果、エスペラントは國際語として決して、架空的なものでないことが立證された。ところが、各國の資本主義的政府はこの勢力をどうかして有効にしやうと目論だ。この際いつも政府の御用となるものは宗教である。基督教エスペラント聯盟は各國の信者に撒を飛ばして、エスペラントを反革命運動に用ひやうとした。そこで勞働者はだまつて居られなくなつた。

これもプラーグに於て、八月中旬萬國勞働者エスペランチスト大會 Liberiga Stelo の第一大會が開かれた。アンリ・バルビュスがこの大會の名譽會長になつたことは、初號に於て述べてある。この大會にはフランス、ドイツ、オランダ、チエコ・スロヴアキア、バルカンの代表約五十人許り集つた。ドイツ統一共産黨は公式に一代表者を送つてゐる。大會は萬國勞働者の國際語としてエスペラントを採ることを決議した。ミユンヘンの一代表が空虚な平和主義を支持し階級闘爭を排したが、その案は見事葬られた

……

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

地方欄

△關門より▽

俺は今關門に來てゐる。此の處は實に好い。內から外へ外から內へと革命過渡期を想はすような元氣の善い潮が間斷なく渦卷いて流れて行く。その樣を觀てゐると俺に失はれた若さも返つて來るようだ。ほんとに總ての根據から破碎し盡され破產し切つた俺は長い間何もせなんだからの。せなんだではない出來なくなつて終つたのだ、出來なくされて終つたのだが、その間に俺は死と共にたつた一つの殘したものへ出きなくされた、なつた、鬱憤の一つ一つをぎしぎしと詰込んで來たのだつた。長い間をそのつめ込んだ袋以外に何一つ不平も言はんで來たのだ。もう俺は數年前迄のような無駄な宣傳だの運動なんてものはしないでゐる。コセ閃の社會主義のサークルなんかで雨蛙のように鳴き合つてたつて仕樣もないからの。今でこそハイかつて聞える社會主義者てう名も古い何百年來の間にあつた改造家や志士に相當して存在する、いつまでたつてもお目出度しお目出度しものの世の中が世の中でゐる。今の俺なんざぁ見苦しい死の延長と當面しながら一日一日と送つてるんだ。何んにも出來なくされた。今の俺は內の袋以外に實に不眞面目だよ。內から外から縱から橫からと虐れ潰し盡された人間にはこうも地球のうち虫の行動が可笑くなつて來るものかな。而し俺が今迄全てへ其の不眞面目さで超然とゐらるゝのは、實に一方に眞面目なその一つ一つの怒りを溜め得べき嚴肅なる死と共に殘してる相對の容物の袋があつたからなのだ。今にこの容物の入り切れない時が來るだらう。俺が外に唯眞面目でゐらるゝといふことは唯△△リストの心以外にはないのだ。もう行くべき道を行つてゐる君達の言ふことは判つたよ、判つた、同感だ、判つたてつたら。言葉といふ奴ぁ憎いからの。

所で實に暗い潮流と波は氣持善い。俺は關門の波にいくら慰めを得てゐるか。俺が此處に流れ來たのは幸福だ。門司から迎へても下關から望んでも彼岸と彼岸、その間に力の黑潮が夜も日もない。まだにガヤ〳〵喧いでゐる奴ぁ來て潮に教えられるがええ。シオのれえ奴共が。赤いヴイが笑つて吳れらあ。

今俺は左舷の窓に身を倚せて潮音と流を下に見乍ら君達にこれを書いてゐる。すぐ腕の下に眞赤な灯は燈つてゐる。

また〳〵だが、所でだ。此の關門にも昔し八年程も前君達のような赤い文藝雜誌があつた。「自我」の後を追つて賫賣文社の技手松本文雄に總永政郎だの淺枝次郎だのゝOの友達が「文藝運動」といふ題名で出してゐたものだ。このサークルは美術講演會

などにかこつけては盛に宣傳をやつたものだ。或時など聽衆が豫想よりも多いのでホク〳〵してゐると半數がスパイであつたなどの笑ひ話もある。雜誌は大分號數を出したようだが毎號發賣禁止とゞ十號許りでつぶれちやつた。その後松本が「高等遊民」を出すとか「ランテリゲアンス」を出すとか言ひながら支那に消息を絶つてからはサークルの姿は解散支離と消えちやつた。この頃は八幡小倉にも或こういふ形式のサークルが大分あつたらしい。現在には神經衰弱のそれも人間社や白樺傾の文學ぼんちや、文學孃や達の數種の短歌誌やサークルがある許りだ。まだ内容は知らんが門司に新人小集の踏頭社といふのがある。それで思ひ出したが、八月の中旬頃渡支の途上をニヒリスト長谷川如是閑氏が門司で一夜講演をやつた。矢張り好かつた。其後下關でマルキシスト河上肇も又講演をやつた。如是閑氏の前に啓明會とかいふのが主催で小倉にぼんくらの入間社同人達の講演もあつた。その外別に變つた事もない。

而し全然君達のような運動や集團的形が近頃は見當らないだけに案外俺の樣に變形した人間が溢れてるのかもそれは知らんよ。いや確かに居るだらうと言つておいて確かにとは變だが、實は今言つた關門の運動といふのはさも古めかしく知つた風に言つてのけたけれ共、それはフトした動機で知り合ひになつた門司のYから今聞いて來た許りの話の飛々その儘なのだ。そのYが俺そつくりと來てゐるんだから全く確かに居るだらうとも言ひ切れもするだらう。又そのY自身とは「居るだらう確かに」と言つてたから。此の潮を見てると寧ろ無形なるが故にの中にこそ確かに居る氣がする。今にこんな人間の袋がやがては入り切れなくなる時があるのだ。

雜誌は嬉しく見た。大分長く、何年ぶりかで文字を書かされた。又いつか。

——關門聯絡船にて—— 宍明共三

△岐阜の增水▽

毎日灰色の空が深く垂れていつ晴れるとも知れない天候である。

郷土——岐阜——の諸川が出水汎濫し、養民と云はず地主といはず一般に不安を感じてゐるといふことを聞いた。話の通り非非の出水だ。九合五勺の増水だと村の者は騷ぎ立てゝゐる。そして數軒の家は浸水し慘な狀態が持ち來たされてゐる、濁流は岸から岸へ一杯に滿ちてゐる。田畑といはず、道路といはず不潔な水が溜つてゐる。野良に出てゐる百姓は米收穫減少を豫想しザツト立ち止つて無言の中にこの不快な有樣を眺めてゐる。收穫時には又地主は苛酷な納米を要求するだらふ。資本主義の暗雲は彼等の周圍を包擁してゐる。この九分五勺の増水は天の晴るゝと共に流れ去るであらふ。然し彼等を包擁する暗雲はいつまで押し付けてゐることだらふか。一體最近までの農民は政治とか社會問題について餘り興味を持てゐなかつた。彼等は自然の恩惠の充分であることに依つてのみ滿足してゐたのである。彼等の所謂素朴な生活は都市のプロレタリア階級の樣な生活の不安はなかつた。そしてその素朴な生活單純な生活に滿足してゐたのである。然し彼等も何時までもその生活に滿足することの出來ない境地に到來したのである。各農業地方からに轟然たる音を立て忽然として不平の聲が發せられる樣になつて來た。その不平の聲は自然の恩惠の稀薄なるに歸因するものではない。新しく課せられたる負擔の苦痛と社會組織と政治と組織とに對する不平の深刻

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

なる筈である。米騒動、小作問題は如何なる原動力に依つて叫ばれる様になつたのか。

自然の恩惠が充分であれば今も昔も變りなく充分に生産される。然し或る地の經濟的恐慌は彼等の生産物を掠ひ去つて仕舞ふ。又生産物は非常の豐穰であるにも拘らず都市には物資の缺乏、生活難の聲が叫ばれる。實に慘しい矛盾が展開されるのである。これ農民が受くる苦痛に違いないのである。更に農民の使用する生産用具は農民の所有物ではないその生産物の大半は生産用具の所有者――地主――に掠略せられるのである。

斯くて農民は自由な生産者の地位から賃金勞働者の地位に移つて行くのである。即ち彼等をして工業勞働者と同樣の苦境に陷らしむるのである。之等に依つて更に又各種産業と密接の關係を以て市場は次第に擴大せられ所有の集注となり少數者の利益のために多數の人間が苦役せればならない樣になつて來たのである。

然しこの暗雲は何時まで彼等を包擁することが出來るだらふか。一掃せんと試みるものは漸次増加し一層やかましく取扱はれる樣になつて來た。然しそれも應々にして傳統的な愚にしつかぬ地主の温情主義に依つて又農民の無智なるため一圖に目前の利のために走ることに依つて地主の讓歩或は雙方の互讓に依つて容易に解決せられ彼等は依然として舊來の苦境から脱することの出來ない苦き悲慘さを演じつゝあるのである。この地――岐阜――は小作問題の頻發することに依つて現に角一般に知られてゐる。爭議は込米廢止といふ一時凌ぎの小問題に端を開いたのであつた。然し彼等の智識の向上と訓練せられたる努力とに依つて其要求が深刻になれば兩者の關係は如何なる現象を呈し來るであらふか。昨年の爭議の如き百幾件に達しその運動も極めて猛烈であり組織的になつて來たのである。然し今やかゝる些事を云々する時期は去つて小作賃を工業勞働賃銀と同樣に見做しての要求に移るの傾向を帶んで來た。かゝる傾向推移は必ずや將來の農業爭議に特色づけられるのであると思ふ。今日の意外の水害は又一波瀾を生ぜしむるものではあるまいか。

増水騒ぎで家宅を取りまさめる氣早やの人間もゐる。そしてその周圍を取卷く不快な暗雲を一掃し樣としてゐる。地主は舊來の小作契約を以て一の恩惠かの如く思惟し安眠をむさぼつてゐる。次の日は何か表現せられるであらふか。峰人生

――十月四日――

一夫氏から

「種蒔く人」ありがたう御座いました。

全體に於いて生氣溌溂として居るのを感じました。お上の役人が、これを禁止するのは勝手だし、また當然でせう。

僕は一度東京に引き上げましたが、家内中の健康が直ぐ損はれましたので、又々小田原へ引き越して來ました。

ところが、警察が大家をつゝいたので、夜引越して來て、翌朝早々顔も洗はないうちに、大家から、一年以上の約束の家を三ヶ月以内にして與れとの交渉を受けました。僕も耶蘇と共に「人の子は枕するところなし」と云はればなりません。

小田原の警察が急に壓迫を加へ出したのは先達ての講演會からです。講演會はたしかに成功しました。非常な反響です。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

原稿はこんなごたくで中々かけません。

詩一篇御送りしました。僕は詩人ではないが、僕の詩は輕んじられてはなりません。僕のは詩人以上の詩なのです。

長篇小説「幻滅の彼方へ」が出ました。本屋から送らせますから御批評御紹介を願ひます。

宗治氏から

詩の檢閲も止むを得ないと思ます。お任せしますから御役人の意志を尊重しておいて下さい。

ジユネヴより

昨夜ラシユナルから　君の消息を聞いて一筆啓上。君からは二度しかハガキをもらつてゐない、コロンボ　と　シンガポールからと。僕は君のたよりを受取つて直ぐ手紙を書いた。それから、二三回　新聞やその他を送つた　筈だ。あの大會の決議も報告書も直ぐ送つてゐる。それにつけても奇怪なことだ………「種蒔く人」が出るそうで結構だ。僕は無論君達の仲間だ。隔週新聞であつた　ラ、ヌヴエル、アンテルナショナルが廢刊になつて、四月一日から新たに「前衛」が………機關紙になつて生れた。こん度は日刊だ、たのむ。「或る青年の夢」の原稿はあのまゝ僕の手許にある。ポリスは五月の騒ぎで入つたがロシヤへたつた。そんな理由で未だ印刷に回らぬ次第だ。ピエールとは手紙の往復をしてゐる。Sは依然として、バヴアリアの暗い處にゐる。日本の切手を欲しいと云つて來た。

僕のアドレスはもう變更せぬ。お互にも見失はぬことにしやう………（C・R生）

片や土田杏村、片や福士幸次郎

—新潮を讀んで—

福士幸次郎さんは、土田杏村さんが「今の思想家中でも一番眞面目でもあり、實力もある一人と信じられるので、出來るだけ同氏のものを讀んだ」そうである。處が、福士幸次郎さんは、土田杏村さんの不用意の雜談風のラッセルの印象記を讀まれて、今迄知らなかつた土田さんの諸種の思想を初めて知ることが出來たが、殘念にも土田さんに對する在來の尊重を裏切つてしまつて、こん度にこん度は、すつかり悲觀されたそうだ。時事新報あたりから當代評論家の第一人者とまでかつがれてゐる福士幸次郎さんともあらうものが、不用意のアラでやつと杏村さんの思想を知られたのださうると、いや驚き入ります。すると、福士さんも僕たちの弟等と同樣に名からしてグロテスクな赤字のDIE KULTURに驚かされたのですね。

福士さんは土田さんの日本現在にの政治に對する豫言に大分氣をもんでゐるやうですが、御心配は無用です。土田さんの豫言などがあてになるものですか。あれは改良社會主義全盛の日和見思想で、今頃のプロレタリアの青年どもが、飛んでもない、誰れがそんな手ぬるいことを想像してゐるもんですか。そして、福士さんは「眞理は決して多數者でない」とおつしやられてゐますが、これだけは御説の通り。だからほんとうのことを云ふ少數が常にひどい目にあはされてゐるのではありませんか。

更に私の言ひたいことは福士さんのいふ「社會主義者の主戰論はあてにならない」とはどういふ意味でせうか。これは誰しも言

はないことです。僕はこれを以ていぢ悪く福士さんを批評するものでも、また不用意のアラを探すのでもありませんが、(僕は今まで福士さんの書いたものを福士さんが土田さんを尊重するやうには見てゐませんでしたが)あゝいふことを臆面もなくいへる勇氣に感心しました。社會主義者は非戰論者であつたのである。しかし、社會主義者の非戰論があてにならないことは、今度の歐洲戰爭で立派な貼札がついたのだ。そこで第三インターナショナルが生れた。僕は考へて見た。もしや非と主の印刷上のあやまりではなかつたかと、そうであると幸である。もし、そうでないとすると、福士さんが「社會主義ばかりが現代文明の解答者でないといふのは、こゝの理由である」などといへる資格があるかどうか疑問だ。幸次郎さんが杏村さんを社會主義者らしく思つてゐるのが、そもそもの間違だ。片や土田杏村、片や福士幸次郎。(赤幣)

靜動――

松本弘二――今回種蒔き社の後援で賣會を開く。種蒔き社のため、また君自身のため奮つて入會ありたし。(申込所。種蒔き社)

柳瀬正夢――種蒔き社の主催で近く個人展覽會を開く。猶ほ、君はグループ・ダンデパンダンを組織中。

小牧近江――村松正俊、佐々木孝丸と三人でやつてゐるバルビュスの飜譯はかなり進歩した。

金子洋文――の戯曲集『村の慈善會』は未だ出ないが、出たらやつつけやうと手ぐすれひいて待つてゐるものがある。

井上康文――今回、第二詩集『愛の翼』を出し豫約を募集する。(申込所、東京市外池袋一〇三三詩人會)

青空會――『藝術は人類の榮光である。その眞價は凡そ現世を越え、國境と民族とを越える。』と云ふ、吾々の耳がタコにらる程聞かされた古い言葉を趣意の冒頭に置て生れたのが上記の會である。この古い言葉がどれ程新しく具現されて行くかは、今後の活動振りによつて拜見したい。

日本未來派運動――の宣言が平戸廉吉君によつて發せられた。

次號豫告

――非軍國主義號――

僕たちは國家主義者の軍備縮少を嗤ふ。毎年十二月は、大多數の青年が兵營に入る月だ。それで十二月號を**非軍國主義號**にした。そして、僕たちはこの與へられたる機會に於て、僕たちの常に思つてゐることを言はうとする

尚ほこの問題に對して、**吉江孤雁、武者小路實篤、大山郁夫、藤井眞澄**諸氏が論文を、**藤森成吉、宮島資夫、山川菊榮、神近市子**諸氏が感想、小説を約された。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

社會主義研究

主筆　山川均

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

社會主義研究

主筆　山川均・山川菊榮

社會主義は現代の產んだ最高の思想である。否な最高の『思想』であるばかりでなく、最大の『力』である。歷史的必然の力は、牢獄の如き現代生活のうちに吾々を繫ぎ留めようとする一切の權力と制限とを無視して、人類を社會主義に向つて驀進せしめて居る。世界は今や、社會主義の新基礎の上に改造せられて居る。本誌は純學術上の立場に立つて、この現代の最高問題たる社會主義の學理と實際運動とを硏究し、批判し、紹介し、解說する、我邦唯一の專門雜誌であります。社會主義を主張する人も反對する人も、均しく本誌によつて其學理的基礎を確實にするの必要がある。

定價（一部金三十錢　半年前金一圓七十錢　一年前金三圓三十錢）

發行所　東京大森入新井町　平民大學出版部　振替東京三四一九一

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

前號目次（發賣禁止）

本　欄

思想家に訴ふ（題言）……種蒔き社
石炭がら（小說）……山川　菊榮
炎の海（詩）……福田　正夫
罷業の朝（句）……山上　正義
勞働運動と智識階級……（評論）……村松　正俊
爛れた眼（詩）……白鳥　省吾
刄に刺されて（詩）……松本　淳三
三人の乞食（小說）……沼田　流人
比叡の雪（感想）……宮島　資夫

批　評

評論（正俊）―小說（洋文）―劇（弘二）―
童話（孝丸）―詩（小牧）……

世　界

勞農露國の大飢饉―赤色露國と興者―
エスペランかイドか―瑞西より……

地　方　欄

爭議の跡を訪れて―赤光會便り……

雜

古事記神話の新研究について（橋井清之助）―三四郎氏から―如是閑氏から―雨雀氏から―インテリゲンツィアの僞らざる感想（中央公論より）……

編輯後記

創刊號は、あれで調子が少し高いといふ廉で、發賣禁止になつたので、多くの讀者の期待にそむくにいたつたことを悲しむ。各方面の御聲援感謝す。非常に心强かつた。と同時に責任を感じた。

僕たちは僕たちで今月號の調子の多少低くなつたことを悲しむ。とくに、感情のむき出しである可き筈の詩には、調子の高いも低いもない。それを無慘無慘ちぎられることは忍びない。僕たちは執筆家に對してお詫びする。讀者よ、印刷の白い個所は盡く血まみれになつたものと知つて欲しい。

山川菊榮、神近市子の原稿が締切後に到着したので、次號に廻さればならなかつたことは殘念であつた。

當分每週月曜日午後五時から七時までなら編輯部に誰れかが居る。御用の方には同時刻なら喜んでお會ひする。

「光」の飜譯は餘程進んでゐる。

種蒔き社には語學研究會の他に運動部が出來た。

定價　一部卅錢□半年前金壹圓八拾錢□一年前金參圓六拾錢御注文はすべて前金のこと□代金の領收は雜誌發送を以てする□送料內國一錢外國四錢

廣告　廣告及廣告料金については直接本社宛問合せを乞ふ

宛先　寄稿、通信、購讀申込及び送金、其他本誌に關する一切の御用向書籍雜誌等の寄贈は凡て『種蒔き社』宛

締切　每月五日

大正十年十月廿九日印刷納本
大正十年十一月一日發行

東京市赤坂區青山北町一丁目八番地
發行人編輯人印刷人　近江谷駉

東京市京橋區南金六町十二番地
印刷所　英文通信社印刷所

東京市赤坂區青山北町一丁目八番地
發行所　種蒔き社

大賣捌　東京堂　上田屋　北隆館　至誠堂　東海堂

大正十年十月二十九日印刷納本　大正十年　月　日第三種郵便物認可
大正十年十一月一日發行

定價金參拾錢

る感想（中央公論より）…………………… 出來た。

大正十年十月二十九日印刷納本
大正十年十一月一日發行　大正十年　月　日第三種郵便物認可

定價金參拾錢

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA